まほろばの夢

ぜろさむ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年ポケモントレーナーと研究者のおじいさんの話。タイトルに深い意味はない。

目次

一話 …… 1
二話 …… 26
三話 …… 46
四話 …… 70

一話

おれが初めて「はかせ」と出会ったのは、フキヨセシティとセッカシティを繋ぐ7番道路だった。

当時、季節は冬で、丈の長い草むらに雪が降り積もって、ずいぶんと歩きにくい状態だったのをよく覚えている。

おれはフキヨセシティ側から7番道路に入って、ねじ山の入り口に向かっている途中だった。しんしんと降る雪の冷たさにいらいらしながら、足元だけを見て黙々と歩を進めていた。

「おや、こんな天気に旅人さんとは珍しい」

だからかもしれない。おれは、真正面から歩いてきていたその人物の存在に、最初まったく気がつけなかった。

聞こえてきた声にぎょっとして顔を上げると、目の前に立っていたのは小柄な老人。白衣を着て白い髭を生やした、いかにも「科学者」という風体のおじいさんだった。

こんな天気でなにが嬉しいのか、にこにことした表情でおれの顔を覗き込んでくる。

「少年、きみはポケモントレーナーだね？　今からねじ山へ向かうのかい？」

なんだろう、この人。やけになれなれしいな。
やたらとフレンドリーに話しかけてくる老人に、おれは最初、疑念の目を持って対応した。露骨に眉をひそめてみせ、あなたを警戒していますよ、と信号を送る。
老人は少しもひるむことなく、
「この気温だとねじ山の攻略は骨が折れるだろう。きみは旅慣れているみたいだけど、冬の山は他とは勝手が違うからね。フキヨセシティから来たのなら、戻って冬が過ぎるのを待った方がいいんじゃないかい？」
と聞いてもいないアドバイスを垂れ流してくる。
「あの、忠告はありがたいのですが、もう決めたことなので」
おれは少し不快になって、語気を強めて言い切った。
「ふうん？　ま、人の旅路にとやかく言うつもりはないけれど。それよりも……」
そこで老人は白衣のポケットの手をやって、赤と白の小さい球体を取り出した。
モンスターボール。
このタイミングで取り出すということは、そういうことなのだろう。
「トレーナーとトレーナーが出会ったら、お約束だよね？」
悪戯っぽい笑みを浮かべて、老人が言う。おれは少し面食らったが、考えてみれば当然だ。こんな草むらに人間がポケモンを連れずに歩いているわけはない。少なくとも

自衛用のポケモンを連れているのは当たり前のことだった。

「こんな天気に、こんなところで、ですか？」

正直、気は進まなかった。ちょうど先日手痛い敗戦を喫して気分が落ち込んでいるところだったし、こんなコンディションでは泥仕合になるのは目に見えている。消極的に停戦を提案してみるが、老人はにこにこ顔を崩さない。

「ねじ山で修行したり、フキヨセジムに挑みに来たトレーナーに野良試合をふっかけるのが、老い先短いじじいの唯一の趣味でね、付き合ってくれないかい？」

ずいぶんと傍迷惑な趣味だ。罪悪感を煽る文言といい、挑発し慣れている感じがなんとも憎らしい。もしかしたら、辻バトルの常習犯なのかもしれない。

おれはもう一度、露骨に顔を顰めて見せたが、老人にはまるで応えた様子がない。にこにこ笑って、おれが試合を承諾するのを待っている。断られるとは微塵も考えていない、といった様子の、無邪気な表情。

はあ、とため息をひとつ。どうやら、やるしかなさそうだ。

「分かりました。ただし、使用ポケモンは一体だけ。『きずぐすり』もなしでお願いします」

おれもポケモントレーナーの端くれだ。徘徊老人相手だろうが、ひとたびバトルが始まれば、手加減をすることはできない。

さっさと終わらせて、ねじ山に入ろう。山に入ったら、野宿（ビバーク）の準備をしなければならない。どれくらい時間がかかるだろうか。早めに拠点を確保して、少しでもバトルの訓練に時間を割きたい。

そんな思考を巡らせながら、おもむろに腰のボールをひとつ、掴み取る。未だに止む様子のない雪しぐれに向かって、おれはボールを高々と放った。

★★★

地元のサンヨウシティでトレーナーズスクールに通っていたときから、おれは人間よりもポケモンとよく遊ぶ子供だった。

もう一年くらい前のことだ。サンヨウシティはイッシュ地方の南東に位置する閑静な街で、そのあたりでは一番人口の多い「大都市」だった。

ヒウンシティやライモンシティを見た後だと、あの小さな街を大都市だなんて恥ずかしくてとても呼べないけれど、狭い世界に住んでいたころのおれにとっては、サンヨウシティは間違いなく「シティ」だったのだ。

サンヨウシティはその周辺では唯一トレーナーズスクールがある街でもあったので、近くのカラクサタウンやシッポウシティからもトレーナー志望の子供達が集まって来

ていて、スクールの規模はそれなりだった。

その中でおれは、入学してから卒業するまでずっと、一番バトルの強い生徒だった。先生が授業用に用意したどんなポケモンとだってすぐに打ち解けることができたし、呼吸を合わせてバトルすることなんて、造作もなかった。

それに引き換え、クラスメイトはトレーナーとしての基本さえなってないやつばかりで、おれは彼らの低レベルさ加減にいつもいらいらしていた。ポケモンに無茶な命令をしたり、バトルで負けたのをポケモンのせいにしたり、ポケモンを道具か何かのように扱ったり……。そんなことが起こるたびにおれは悲しむポケモンのことを庇って、クラスメイトと衝突していた。

入学以来そんなことを繰り返していたから、結局卒業までにクラスに馴染むことはできなかった。それでもおれは平気だった。人よりも、ポケモンと関わっていた方が楽しかったからだ。

人間同士の関係は、言葉で容易に通じ合えるはずなのに、無駄が多くて複雑で、かえって神経を削られる。人間はすぐに嘘をつくし、自分の心を隠そうとするからだ。

その点、ポケモンたちは素直で、自分の感情を隠そうとはしない。よく観察すれば、彼らがどんな気持ちで、いま何を欲しているのかはすぐにわかる。人間と違って、彼らと上手くやるために必要なことはシンプルだった。

「きみはポケモンの気持ちがよくわかるんだね。感受性が高いのかなあ」

先生はそんなことを言っておれを褒めた。あのときはおれが鋭いんじゃなくて周りが鈍すぎるんだ、なんて憎まれ口を叩いたけれど、今から考えてみれば、おれはたしかに人よりもポケモンの心を掴むのが上手かったのかもしれない、と思う。そうでなければ、旅を始めて一年も経たないうちに、五つものジムバッジを手に入れることはできなかっただろう。

このイッシュ地方にも、カントー・ジョウト地方やホウエン地方と同じように、ポケモンリーグがあってポケモンジムがある。ジムはポケモントレーナーがバトルの腕を磨く施設で、ジムの長であるジムリーダーを打倒すると、その証としてジムバッジが貰える。そして、八つあるジムを全て制覇すると、ポケモンリーグ――全てのポケモントレーナーの憧れの舞台への挑戦権が手に入る、という仕組みだ。

十二歳でスクールを卒業した後、他の大多数の卒業生と同じように、おれは各地のジムを巡る旅に出た。全てのバッジを集め、ポケモンリーグに挑戦する。スクールのトレーナーなら誰しもが一度は目指す夢だ。

ほとんどのトレーナーが一つ目か二つ目のジムで現実の厳しさを思い知らされ、別の道を模索し始める中で、おれだけは順調にジムを制覇し、バッジを集めていった。

一つ目、二つ目のジムでは道中で仲間にしたポケモンたちと絆を深めつつ、スクール

で学んだ知識を応用してバトルのセオリーを体に覚え込ませ、三つ目、四つ目のジムではより専門的なバトルの戦略や、ポケモン育成の理論についても学んで、一人前のポケモントレーナーとして実力を高めていった。

難関と言われているバッジレース後半に突入してもおれたちの勢いは衰えず、ホドモエジムではジムリーダーのヤーコンさん相手に、接戦の末に勝利をものにした。

バトル終盤、互いに残り一対一の場面で見せた相棒のコジョンドとの連携は、ヤーコンさんも手放しで褒めてくれたほどで、間違いなくおれ史上最高の勝利だったと言える。

五つ目のバッジを手に入れたおれは、有頂天だった。なにせ、バッジを制覇したトレーナーの平均記録がだいたい四年なのに対して、おれは一年経たないうちに半分以上のバッジを集める好ペースで快進撃を続けていたのだ。

どうやらおれには、トレーナーとしての才能があるらしい。

ジムバッジをコンプリートするだけでも、毎年スクールに一人いるかいないかの偉業なのに、おれはこれまでの制覇者の誰よりも早いペースでバッジを集められている。

順風満帆、前途有望。おれとおれのポケモンたちならば、チャンピオンだって夢ではない。片田舎から彗星のように現れた天才ポケモントレーナーとして、リーグの歴史に名を刻むんだ――!!

そんなことを、半ば本気で考えるくらいには、おれは増上慢になっていた。

その道に、つい先日石が置かれた。

フキヨセシティでのジム戦だ。ジムリーダーのフウロさんは年若い女性で、ひこうタイプポケモンの使い手だった。身軽なスピードバトルが持ち味で、テンポのいい連続攻撃を展開する。どっしりとしたベテランジムリーダーのヤーコンさんに比べれば、老獪さが足りないトレーナーだとおれは分析していた。

ひこうタイプのスピードを止め、おれたちの主戦場である地上に引き摺り下ろす。その目的で、道中仲間にしたバニリッチを軸にした戦術を組んだ。情報収集も、バトルの方針も完璧。後顧の憂いはない。おれは意気揚々とジムに乗り込み、――そして、かつてない敗北を経験した。

あえて言葉にするなら、「完敗」だった。全く文句のつけようもないくらいに、完全無欠に負けた。評価できる点など何一つもなかった。フウロさんはおれの戦術を一から十まで読み切り、その全てに対策を用意していた。最初から最後までバトルの主導権を握ることなく、おれはただポケモンたちが蹂躙されていく様を、無様に口を開けて眺めていることしかできなかった。

「性急すぎ、安直すぎ、単純すぎ。考え無しに突っ込んできたとしか思えない。ジムリーダーを舐めてたの？　あんなバトルじゃ、他のどのジムリーダーだって倒せやしない

よ」

バトルの後、ポケモンたちが治療を受けている間に、フウロさんは厳しい表情でそう言った。おれは茫然自失として、叱責をまともに受け止める余裕すらなかった。

「ポケモンへの指示も抽象的だったし、反応も鈍かった。明らかにバトルに集中できていなかったよ。ポケモンたちが必死に戦っている側で、きみは一体何を考えていたの？」

あなたを倒して、また一歩チャンピオンに近づく自分です。

当然、そんなことを言えるわけもなくて、黙りこくるしかないおれに、フウロさんはため息をこぼした。

「とにかく、今のきみには、私のジムのバッジを渡すことはできません。きみはまだ年も若くて、才能だって持ってる。時間はじゅうぶんにあるんだから、今の自分に必要なものが何なのか、よく考えた方がいいよ。それを考えないで突き進んだトレーナーは、必ずどこかで潰れてしまうから」

彼女の澄んだ瞳は、おれの中でむくむくと膨らんでいた薄っぺらな俗心を見透かしているようだった。

羞恥に耐えきれず、おれはジムを飛び出した。宿に逃げ帰り、急いで荷物をまとめて、ねじ山攻略の準備を進める。

フキヨセジムに再戦を挑む気概は、ぽっきりと折れていた。
今はただ、時間が必要だ。「敗北」という現実から、逃げるための時間が。
ぼろぼろになった自尊心をかばうようにして、おれはその日のうちにフキヨセシティを後にした。

★★★

フキヨセシティを出たおれは、ねじ山を超えてセッカシティに入り、さらにソウリュウシティにまで抜けるつもりでいた。
理由の半分は、とにかくフキヨセシティから離れたいという気持ち。もう半分はソウリュウシティならばポケモンジムがあり、ジム戦ができるからだった。
そこでジムリーダーに勝利すれば、フキヨセでの敗戦が偶発的な「事故」に過ぎなかったと証明できるかもしれないし、折られた自尊心を取り戻すことだってできるかもしれない。
壊れかけの自尊心を回復させるためには、おれは自分の才能がまがい物でないことを自分自身に納得させる必要があった。完敗のトラウマを払拭するためには、勝利で記憶を塗り潰すしかない。おれはそう考えて、一刻も早くソウリュウシティへ向かおうとし

ていた。

そして、雪の降り積もった7番道路をようやく抜けよう、というころになって、珍妙な老人に行き会った。やたら馴れ馴れしく絡んできたかと思えば、暇つぶしにバトルをしてくれという。

ふざけるな、こっちは今そんな気分じゃないんだ。そんなにひまなら、野生のポケモンでも相手にしていればいいだろう。

そう怒鳴り散らしてやろうかとも思ったが、あまり子供っぽい真似をすれば、かえって自分が傷つくだけだということはわかっていた。渋々了承し、とにかく早急に片をつけるという方向で行くことにした。

最速最短で、けりをつけてやる。そう意気込み、ボールを投げた。

結論から言うなら、狙い通り勝負はすぐについた。ただ、狙い通りになったのは結果だけだった。

「なんだ、これ――？」

突きつけられた現実を受け入れられず、おれはそうひとりごちる。目の前には、草むらに頽(くずお)れて動かなくなった、ギガイアスの巨体。しんしんと降りしきる雪の中で、おれのギガイアスは、素人目に見ても明らかなほどに戦闘不能になっていた。

「ふむ、どうやらぼくの勝ちだね？」

したり顔で、老人が言う。その傍らに立っているのが、ぼくのギガイアスを戦闘不能に追い込んだ彼のポケモン。

チラチーノ。イッシュ地方に広く生息するチラーミィというポケモンから進化する、ノーマル単タイプのポケモンだ。

そう、ノーマルタイプだ。いわタイプのギガイアスに対して有効打を持たないノーマルタイプのチラチーノで、老人はおれを圧倒してみせたのだ。

信じられない思いで、おれは老人を見た。相変わらずそこに立っているのは、場末の研究所の所長のような、くたびれた白衣の小柄な老人。ジムリーダーのような強者の覇気をまとっているわけでもない、バトルの素人にしか見えないおじいさんだ。

なんだ、これは？　なぜこのおれが、こんなゆるふわな雰囲気の老人に遅れを取っているんだ？

真っ先に不正を疑ってみたが、バトルの内容を思い返してみてもなんら不自然なところはない。おれと老人は真っ当にバトルをして、真っ当に白黒をつけた。とするなら、考えられる理由は二つだ。つまり、老人が実は無名の凄腕トレーナーであるという可能性と、おれの不調が極みに極まってついに趣味道楽でバトルをやっている隠居老人にも遅れをとるレベルにまでなってしまったという可能性。どちらも同様に受け入れがたく、おれは「こんらん」して、しばらく立ち尽くしかなかった。

しかし、いつまでも呆然としているわけにはいかない。バトルが終わり、勝者と敗者が決まった。そのあとトレーナーがやるべきことは、ひとつだ。おれは苦い顔をして、それを切り出した。

「……いくら、支払えばいいですか？」

野良試合だろうが、バトルはバトルだ。トレーナー同士のバトルの後は、敗者は勝者に賞金を支払う。そこまでやって初めて、ひとつのバトルが終わるのだ。

とはいえ、フキヨセシティで冬のねじ山用の装備を揃えるのにけっこう使ってしまっているので、現在のおれの懐にはそんなに余裕がない。あまり高額の請求には応えられないだろう。世知辛い悩みが敗北の惨めさと相まって襲いかかり、不覚にも視界が滲む。

ああ、くそ。マジで何やってんだ、おれ。

しかし、老人はにこにことしたまま大げさに腕を振り、言った。

「いやいや、賞金はけっこう。旅の少年からなけなしの路銀を毟り取るほど、ご飯には困っていないからね」

「しかし、そういうわけには」

老人の主張はおれにとって願ったり叶ったりだったのだが、トレーナーとしての矜持が邪魔をして素直に好意に甘えることができない。食い下がるおれに、老人は少し考え

たあとで、こう提案した。
「そうだねえ。それじゃ、こういうのはどうだい？　実はぼくは、この先ちょっと行ったところにある研究所でポケモンの研究をしているんだが、人手がぼく一人しかいなくて困るときがあるんだ。きみがしばらく助手を務めてくれるなら、非常に助かるんだけど」
　要するに、お金ではなく労働で支払え、ということだろう。泊まり込みのバイトのようなものだ。そうすると、ソウリュウシティに行くのは先延ばしにせざるを得なくなるが、ねじ山近くに拠点を確保できると思えば、そう悪い話でもない。なにより、自分から言い出した手前、支払いを撤回するわけにもいかなかった。
　おれは老人の申し出を受け、彼の案内に従って再び雪の中を歩きはじめた。

★★★

　老人の案内でおれが連れてこられたのは、ねじ山の入り口にほど近い場所にぽつんと建ったコンクリート打ちっぱなしの建造物だった。周囲を自然に囲まれた中に突如として出現するのっぺりとした灰色の壁は威圧感が強く、悪天候と相まっていかにも寒々しい印象を与えている。

どうやらここが、この老人の研究所らしい。

「ようこそ、ぼくの研究所へ」

老人は相変わらずにこにこ笑ってそう言うと、金属製のドアを開けておれを中に招き入れる。

中に入ってみると、室内は意外に暖かくなっているようだった。コンクリートに防寒性能は期待できないだろうなと思っていたが、この分なら存外過ごしやすいかもしれない。

案内されるがままに奥に進み、研究所の間取りの説明を受ける。

一人で暮らすには相当広い建物の中を、老人は「研究室」「生活スペース」「それ以外」で区切っているようで、おれの寝室としては、生活スペースのうちの一室を割り当ててもらった。

「それで、助手っていうのは具体的に何をすればいいんですか?」

一通り建物の中を見終わった後。連れてこられたリビングのような部屋で、おれは老人に切り出した。

「ああ、別に研究の手伝いをしてくれというわけじゃないから、安心してくれていいよ。細々とした雑用は頼むかもしれないけど、基本的には自由にしてくれていい」

「そうですか……」

助手として働いてもらって賞金の代わりにする、というのはやはりとっさにひねり出したこじつけだったのだろう。老人は本当におれに何かを要求しようとは思っていないようだった。

それはそれで、おれは老人の家に泊まらせてもらっているだけになるので、気が引けるのだが、老人にそれを言っても困らせるだけだろう。

せめて自分で雑用を見つけて、賞金分働いてから去ろう。

そう気持ちを切り替えて、おれはここに来てからずっと気になっていたことを訊くことにした。

「そういえば、あなたはここで一体何を研究しているんですか？」

「はかせ、だ」

「え？」

「ここではぼくのことは、はかせと呼んでくれたまえ少年助手くん」

「は、はあ。では、はかせ」

「うむ。ぼくがここで何を研究しているか、だったね？」

「はい」

「聞いてくれるかね？」

「はい？」

はかせはそこで、にやりと笑った。

「まず、きみはテレパシーというものを知っているかね」
「エスパータイプのポケモンに見られる特性のことですよね」
「うむ。一般にテレパシーというと、そうだ。エスパータイプポケモンの一部に見られる、高度なマインドリーディング能力。バトルでこれを発揮すれば、味方の思考を読み取り同士討ち（フレンドリーファイア）を避けることができる」
「もしかして、はかせはそれを？」
「いいや、そうではない。少年、ぼくが研究しているのはね、ポケモン同士のテレパシーではなく、ポケモンと人間の間に見られるテレパシーなんだ」
「人間と、ポケモンの間の？」
いまいち意味が読み取れないおれが首を傾げると、はかせは笑みを深めて補足説明をする。
「そうだね、なんと説明したらいいかな……。まず、通常ポケモントレーナーとポケモンが関わるとき、どんなものにも反復練習による慣れが必要だよね？　例えばトレーナーがポケモンに技を指示するときは、繰り返して技を指示し、ポケモンに技の名前を覚え込ませる必要がある。トレーナーが『かえんほうしゃ』という音の並びを口にしたとき、

どう行動するのが正解なのか、ポケモンはすぐには理解できないだろう？　だが、繰り返し練習しているうちに、ポケモンの頭の中で『かえんほうしゃ』というワードと、炎を吐くという行動がリンクするようになり、やがて条件反射で指示に従えるようになる。この状態が、いわゆる『技を覚えた』状態だ」

おれはこくりと頷いて理解を示す。

はかせの専門的な説明は、おれのトレーナーとしての経験を理論で分解して説明したものだった。おれはポケモンが技を覚える過程の詳しいメカニズムは知らなかったが、どうすればポケモンが技を覚えるのかはよく知っていた。

「だけど、これはあくまで表層的な関わりでしかない。ポケモンが指示に従って炎を吐けるようになったからと言って、ポケモンが『火炎放射』という言葉の意味を捉えたわけではない。あくまで『かえんほうしゃ』という音と特定の行動が一対一で結ばれただけだ」

なるほど、そうかもしれない。ポケモンが人間の言語を完璧に理解できるなら、技という概念ももっと曖昧でいいはずだ。そうでないのは、ポケモンは人間の言葉を完璧には理解できないということの証拠なのだろう。

「もちろん中には、高い知能を持つポケモンもいる。　人間の言語の意味を正確に把握できるほどに賢いポケモン。エスパータイプにはそういう種族も多いだろう。だけど、

トレーナーとポケモンの関わりという意味では、さらに一段階上があるんだ」
「それは？」
「深層意識――つまり、精神の最も深い領域でトレーナーとポケモンが繋がる場合さ。言語やジェスチャーに頼らずとも互いの考えていることが手に取るように把握でき、呼吸をするように連携することができる関係……。トレーナーの中には、ポケモンとそういう関係を結ぶことができるものがわずかだが存在する」
「……もしかして、それがはかせの言う『テレパシー』ですか？」
おれが思いつきで質問を飛ばすと、はかせはにかっと歯を見せて笑った。
「鋭いね！　勘が働くのはいいトレーナーの条件だよ。きみはきっと、いいポケモントレーナーになる」
はかせがあまりに直裁的に褒めるので、おれは少しむず痒くなって、咳払いをした。
「おっと失礼、それで、テレパシーについてだね。ぼくら研究者の間では、一部のトレーナーとポケモンの間に見られる深層レベルでの繋がりのことを、特性のテレパシーとは区別して、いかめしく『精神感応』と呼んでいる。そして、ポケモンと深層レベルで繋がれるトレーナーのことは、『感応者』と名付けているんだ。
能力の程度にはかなり個人差があって、あらゆるポケモンと心を通わすことのできる人もいれば、特定のタイプのみ可能という人もいる。さらに言えば、この能力は最近発

生したものではなく、ずっと昔から人類に備わっていたものであることが分かっている。神話を読み解くと、かなり古い時代からこの類の能力を持った人間は存在していたことが推測できるんだ」
「神話、ですか？」
「そう。例えば、イッシュ地方の建国神話がある。話を聞いたことは？」
「えっと、確か双子の王とそれに従う二体のポケモンの話ですよね？」
　正直神話にはあまり詳しくなかったが、おれは記憶を引っ張り出して、なんとか答えを出した。無理に答えなくてもはかせは話を進めただろうが、おれは自分から、はかせの話についていきたいと思っていた。はかせの話はスクールの授業の何倍も面白く、いつのまにかおれははかせの講義にのめり込んでいたのだ。
「ぼくはね、その双子の王こそ、古代イッシュ最大の感応者だったのではないかと睨んでいるんだ」
「それは、なぜですか？」
「イッシュを建国した後、双子が争いを始めて、一度は和解したものの、子孫は争いを続けたので、双子のそれぞれに従ったポケモンは怒り、イッシュを焼け野原にした、というくだりは覚えているかい？」
「うろ覚えですけど、一応」

「考えてもみてほしい。まだモンスターボールもない時代に、イッシュ地方をまるごと焼け野原にするほどの力を持ったポケモンが、たかが人間の王になぜ従ったのか？　理由は一つだ。双子の王は、深層レベルでそのポケモンの心に語りかける力を持っていたからだよ」

はああ、とおれは大きく息を吐いた。はかせの壮大な推測は、壮大過ぎてどこまでが信じて良い話なのか見当もつかなかったが、はかせの熱心な語りは聞くものを楽しませる魔力をもっていた。

「面白いことに、どの地方の神話にも、イッシュの双子の王のようにポケモンと心を通わせ、力を得た英雄が登場するんだ。そして現代でも、この能力を持っている人間は優れたポケモントレーナーになりやすいと言われている。各地方のジムリーダーや四天王、チャンピオンクラスには、この特性を持ったポケモントレーナーが何人もいるしね」

「そうなんですか？」

話が卑近な内容になり、おれは思わず身を乗り出して聞く姿勢を整える。四天王やチャンピオンが身に着けている能力、と言われれば、聞き逃すわけにはいかない。

「分かりやすい例を挙げると、イッシュリーグの現チャンピオンだ。若くして強豪ひしめくイッシュリーグの頂点に立ったあの少女は、幼い頃からドラゴンポケモンと仲を深めるのが異常に早かったという。彼女の養父が言うには、まるで前世からの知り合いで

あるかのように竜と心を通わすことができたのだとか」

おれは、つい先日歴代最年少でイッシュリーグのチャンピオンになった、褐色肌の少女のことを思い浮かべる。いまやイッシュ地方最強のポケモントレーナーである彼女は、ドラゴンポケモンと心を通わすことのできる感応者だったのか。

「さらに、ぼくがいままで出会った中で最も強力な感応者だったある青年は、タイプの制約なくあらゆるポケモンと心を通わすことのできる万能型の感応者だった。彼は独特の表現で、精神感応のことを『トモダチの声を聴く』と言っていた」

「そんなトレーナーが、いるんですか」

信じられないような話だった。あらゆるポケモンと心を通わせることができるなんて、どんな環境で育てばそんなことができるようになるのだろう。

あらゆるポケモンの心が、言葉を聴くように理解できる世界。それは、おれの想像力の外側にある世界だった。

「実は、この能力が先天的なものなのか後天的なものなのかは、未だに解明されていないんだ。トレーニング次第で身につけられるのか、そうでないのか。ぼくはこれまで何人ものジムリーダーやリーグトレーナーたちを追跡調査してきたが、強力な要因となりそうな共通項は見つからなかった。子供の頃からポケモンに親しんでいたのは皆同じだったけど、それだけでは要因とまでは言えないしね。だけど、もしこのメカニズムを

解析することができれば、より多くの人が感応者となってポケモンと心を通わすことができるようになる。そうなればそれはトレーナー学のみならず、携帯獣学そのものに革命になるとぼくは信じているんだ！」

　果てしない夢を語るはかせは、まるでチャンピオンリーグに憧れる子供のようで、そのあまりに純粋な姿に、おれはほんの少しだけ羨望を覚えてしまう。

「はかせは、どれくらいの間その研究を続けているんですか」

「そうだね……大学時代も含めると、もう五十年になるのかな」

「五十年!?」

　飛び出してきた数字は想像を絶するもので、おれは思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。五十年と言えば、おれがいままで生きてきた人生のおよそ四倍だ。トレーナーになって旅をした一年でさえ、おれは長かったと感じてしまうのに、その五十倍もの時間をひとつの研究に費やすというのは、一体どういう気持ちなのだろう。

　ちょうどトレーナーとして壁にぶつかっていたおれは、はかせに質問せざるを得なかった。

「嫌になったりはしないのですか？　実験で失敗して、もう止めてしまいたいと思ったことは?」

「止めてしまいたい、というのは無いかな。実験に失敗することはしょっちゅうだけど、

それで落ち込んだりというのもないしね」

おれが超人を見るような目ではかせを見ると、はかせは苦笑して、

「そもそも、研究者にとって失敗は苦痛ではないんだ。バトルでの敗北と違って、実験での失敗では失うものがない。その方法ではうまくいかないという結果が得られるわけだからね。変なことをいうようだけど、研究者にとって失敗とは、前進と同じ意味なんだよ」

それからもはかせは淀みなくしゃべり続け、おれが軽い気持ちで始めた雑談は、気づいたときには二時間にも及ぶ大講義に発展していた。

今までよっぽど人に話す機会に飢えていたのか、はかせは終始楽しそうな表情を崩さず、おれもそんなはかせの邪魔をするのが忍びなくて、ずるずると最後まで付き合ってしまった。

二時間後、もう窓の外もすっかり暗くなったころ、

「――だからね、なぜ精神感応が発生するのかの詳しい説明はなされていなくとも、どういう条件がそろったときにそれが発生するのかというデータはある程度集まってきているんだ。ぼくがいま進めているのは、機会の力を借りてその条件を再現することで、非感応者を感応者にするデバイスを開発しようという試みで、――って、あれ、もうこんな時間か。悪いね、長々と話し込んでしまって」

全く「悪いね」と思っていなさそうなほくほく顔で、はかせはようやく話を切り上げた。

「い、いえ。興味深いお話をありがとうございました……」

実際、はかせの話は面白かったのだが、流石に二時間にも及ぶ長話はきついものがあった。ポケモンバトルのために鍛えているおれでも、体力を根こそぎ持っていかれたくらいだった。

一方的に話し続けていたくせにぴんぴんしているはかせが果たして本当に人間なのかは、多分一生解けない謎である。

その後、おれは割り当てられた寝室に戻り、ベッドに横になった。

明日からは研究所での生活が始まる。

いつまで滞在することになるのか、全くわからないけれど、少なくとも退屈はしなくて済みそうだと、そう思ったのだった。

二話

おれがはかせの研究所に来てから、一週間が経った。

助手という名目で連れてこられたのにも関わらず、初日に「基本的に自由にしてくれていい」と言い渡されてしまっていたおれは、どうにかリサーチをして、研究所内での自分の仕事を見つけることに成功していた。

その仕事というのが、他でもない、掃除である。

根本的な問題として、はかせにはものを片付ける習慣がない。人里離れたねじ山近辺で、一人用には絶対に大きすぎる物件で暮らしていたことが原因だと思われるが、基本的にはかせはものを出したら出しっぱなしが当たり前の生活を送っている。

服や食器は言わずもがな、大切な研究資料であるはずの書籍や論文でさえ、元の位置に戻すということをしない。そもそもそういう思考回路が存在していないかのように、使用するたびに置く場所がころころと変わっていくのだ。

はかせはそれで特に困っていないらしいが、元々几帳面な性格のおれにはその適当さ加減がどうにも許せず、はかせに代わってものを片付けることを、己が使命として課したのだ。

すでにこの五日間ほどで、「研究室」と「生活スペース」をあらかたやっつけたおれの今日の戦場は、「それ以外」に区分される部屋の一つ、物置きである。

研究所の隅の方に位置する物置きには、おそらくここにはかせが引っ越してきたときに運び込まれて、そのまま放置されたのであろうダンボール箱が、大量にひしめき合っていた。おれの背丈を上回るほどに積み上げられたダンボール箱の山は、デパートの倉庫のような圧迫感を生み出しており、これまでのどのエリアよりもおそらく難敵であろうことがわかった。

時刻は朝の九時。

おれははかせに許可を取り、早速その難敵を切り崩しにかかった。相棒のコジョンドがダンボール箱を運び、おれはカッターナイフを使って箱を塞いでいるガムテープを切り開いていく。一年共に旅をしてきたおれとコジョンドのコンビネーションは完璧で、初めは城壁のようにも思えたダンボールの山は次々と陥落し、中身は分類されて然るべき場所に収まっていった。

遠くの方では、コジョンド以外のおれの手持ちと、チラチーノをはじめとするはかせのポケモンたちが仲良く遊んでいる声が聞こえてくる。

箱の中身は、何に使うのやらよくわからない実験器具の他は、ポケモンフーズやインスタント食品などの日用品がほとんどで、使い道に困るということはなさそうだった。

そのおかげもあって、昼過ぎには室内のほとんどのダンボールは開封し終わり、ぎゅうぎゅう詰めだった物置きも、だんだん床が見えるようになってきていた。

おれがそのダンボール箱を見つけたのは、室内のダンボール箱も残りわずかとなって、ようやく戦いの終わりが見えてきたというときだった。

他の大量のダンボールに埋もれるようにして収まっていた、明らかに他のものよりも使い古された様子の、ぼろぼろのダンボール箱。角の辺りは擦り切れて丸くなっており、何度もガムテープを貼ったり剥がしたりしたような痕跡がそこかしこに残っていて、通販で買ってそのままになっていたような他のダンボール箱とは明らかに異質な気配を放っている。

これははたして、開けてもいいものだろうか？

何やらプライベートなにおいのするダンボール箱の登場に、おれはわずかに尻込みをする。はかせに直接聞ければ早いのだろうが、今日に限って彼は朝方から出かけていってしまっていたので、その選択肢は選べない。かといって、はかせが帰ってくるまで物置きは放置、というのもなんだか気持ちが悪い。

一応許可はとってあるのだから、開けても構わないはずだよな……？

心の中で自分に言い訳しつつ、おれは思い切ってカッターナイフを入れ、そのダンボール箱を開いた。

箱の中身は、思った通りはかせの私物だった。入っていたのは、山男が使うような本格的なバックパックが一つと大きめの寝袋、数冊の日誌（レポート）、長方形の金属ケース、何やら奇妙な色の鉱物がいくつかと、折りたたみ式の釣竿が一本など、旅の持ち物と思しきものばかり。そのどれもが年季の入った傷だらけの代物で、おそらくははかせの「たいせつなもの」なのだろうと推測できる。

中身を丁寧に取り出し、選り分けていく過程でおれの目に留まったのは、日誌と銀色の金属ケースの二つだった。金属ケースの方は、長財布くらいの大きさで、古いものではずなのに光沢が陰っていない高級感のあるものだった。

「これって、もしかして」

おそるおそる開いてみると、予想通り、ケースの中に収められていたのは、異なるデザインの八つのバッジ——ジムバッジだった。

おれの持っているバッジとはデザインが違うので、どの時代の、どの地方のものなのかまではわからないが、おそらくジムバッジで間違いないだろう。

かなり長い間置きっ放しだったのか、バッジはかつての輝きを失ってくすんでしまっているが、見るものを惹きつけるようなジムバッジ特有の雰囲気は未だに健在だ。

おれはしばらくその場に立ち尽くして、そのバッジに見入ってしまう。

ジムバッジが八つ揃って同じところに存在する光景は、そうそう見られるものではな

い。理由は単純で、それくらいバッジの制覇者というものが少ないからだ。ポケモントレーナーの中でも全てのバッジを揃えられるのは一握りのエリートだけ。誰でも手に入れられるものではないからこそ、コンプリートされたジムバッジとはそれだけで大きな価値を持つのだ。

驚愕の一方で、おれはどこかで納得もしていた。一週間前の初邂逅。あのバトルではかせは、おれのギガイアスを相手にチラチーノを巧みに指揮して勝利を奪い去った。あのときは深く考えることはしなかったが、今から思い出してみるとはかせのトレーナーとしての技量はとても「バトルが趣味のおじいさん」では済ませられないレベルだった。

だが、バッジコンプリートの経験があるトレーナーだというのなら、説明はつけられる。おれは初見ではかせのことを格下扱いしたが、本当ははかせの方がトレーナーとしておれよりもずっと格上だったわけだ。

「やべぇ、そう考えるとおれってめちゃくちゃダサいな」

格上相手に舐めて力押しなバトルを展開した挙句、タイプ相性を引っくり返されて敗北する……。まるで初めてポケモンを貰って全能感に浸っている子供の所業じゃないか。黒歴史確定だぞ、くそ。

嫌なイメージを振り払うためにケースを閉じて、続いておれは日誌の方に目をやった。分厚い灰色の表紙で装丁された実用性の高いデザインの日誌は、昔から多くの旅の

トレーナーに愛用されてきたクラシックモデルのものだった。

数冊あるうちの一冊を取り出し、目を通す。表紙のところには小さく「ニゲラ」と名前が書いてあった。ほとんど呼んだことはないが、これははかせの本名だ。中身は若かりし日のはかせが旅に出てからの日記とバトルの記録を兼ねているようで、どのページも上から下までびっしりと文字が書き込まれている。日記ははかせの一人称視点で描かれており、いろんな登場人物が登場していたが、その中でもことさらに目についたのは、「メア」という固有名詞だった。

人間なら女性の名前だが、日記の記述を見る限り、ポケモンのニックネームだろう。文章の端々からは、はかせがメアに向けていた愛情や信頼が読み取れて、彼と彼女はよき相棒同士だったことがうかがえる。

おれは日誌を読み進め、はかせの旅路を頭の中に思い浮かべる。

はかせは才能に溢れたポケモントレーナーだった。ポケモンと心を通わせることに長け、バトルにおいては直感的に最良の選択を下すことができた。ただ、彼はどんなポケモンを指揮してもその能力を十全に引き出すことができたが、彼が関わった多くのポケモンの中でもメアの存在は別格だったようだ。

旅を始める以前のはかせの記述はないが、察するにメアは、はかせの最初のポケモンだった。共に多くの時を過ごし、多くの困難を乗り越えた間柄だったのだろう。あるい

はおれとコジョンドのように、幼い頃から兄弟のように育ったのかもしれない。

はかせはメアと始めた旅の中で、やがて仲間を増やし、ひとつ、またひとつとジムバッジを入手していった。はかせは旅を始めて二年という短さで、全てのジムバッジを手に入れた。ジムバッジの制覇は一流トレーナーの証であり、ポケモンリーグというトレーナーにとっては最高の舞台への挑戦権が与えられたということでもある。はかせはその舞台に上がるため、チャンピオンロードに挑む準備を整えた。

この頃のはかせはかなり野心に溢れたトレーナーだったようで、日誌には今のはかせからは考えられないような不遜な言葉もうかがえた。

『オレは誰にも負けない。メアとオレなら、チャンピオンにだって勝てるに違いない。絶対にポケモンリーグを勝ち上がり、オレたちの最強を証明してやる。』

驚くべきことに、はかせがチャンピオンロードに至った年齢は、現在のおれよりもさらに年若い頃だったようだ。トレーナーズスクールにも通わず、独学で旅に出たクチなのだろう。はかせはまさに有頂天だったに違いない。才能と直感で、自分よりも経験豊富なトレーナーを打ち負かす快感は、おれもよく知るところだった。

そして、おれと違って折れることも曲がることもなかったはかせは、強烈な野望を抱いたままチャンピオンロードに挑み、――。

「――あれ？」

そこから先のページは、白紙だった。ぺらぺらとページをめくってみても、日誌にはそれ以上の記述はない。明日いよいよチャンピオンロードに挑むのだという無軌道な興奮を書き連ねたページで、はかせの旅の記録は終わっていた。

おれは日誌から顔をあげ、前方の虚空を見るともなく見た。

日誌を頼りに思い描いていた想像を補完するように、若かりし日のはかせの「その後」を推測してみようとする。

日誌の終わり方と、はかせの現状を考えれば、答えはひとつだ。つまり、何かが起きたのだ。この日誌のページを書いた直後から、翌日にかけて。はかせの胸の内に宿る野望の火を、跡形もなくかき消してしまうような何かが。

――間違いなく天才ポケモントレーナーだった彼に、ポケモンリーグ挑戦を諦めさせてしまうような、何かが。

「……」

おれは日誌を置き、物置きの入り口に目をやる。

相変わらず遠くからポケモンたちの遊ぶ声が聞こえてきているだけで、人の気配はしない。

はかせはまだ、帰っていないのか。

おれは日誌を元に戻し、物置きの片付けを再開した。

★★★

はかせの研究所に滞在して、そろそろ二ヶ月が経とうとしている。
すでに冬は去り、研究所がある7番道路では、地面を覆っていた分厚い雪が溶け始めて、春の気配が漂っていた。
研究所へ来た当初は、フキヨセシティでのジム戦とはかせとの野良試合での思わぬ連敗によって、トレーナーとしての自信を失いかけていたおれだったが、研究所での規則正しい生活と、ねじ山での訓練を繰り返すうちに、調子を持ち直すことに成功していた。手持ちのポケモンたちも、一年間の旅路で溜まっていたストレスを解消できたようで、最近は皆すこぶる調子がいい。
だけど、いや、だからこそ、おれはいつまでも、この場所に留まっているわけにはいかない。
今の季節なら、ねじ山を攻略するのも二ヶ月前ほどには苦労しないだろうし、二ヶ月の掃除代行で、はかせに対する借りもしっかり返済できていると思う。ならば、いわゆる潮時というやつだろう。
「……さて、いくか」

この研究所を発つときが、やってきたのだ。

お別れの挨拶をするために、はかせを探す。

朝なので本来なら寝室にいるはずなのだが、ここ最近のはかせは何やら忙しく研究にのめり込んでいるようで、研究室で寝ていることも多かった。

金属製のドアをコンコンと二回ノックして、室内に呼びかける。

「はかせ、起きていますか?」

返事はない。

室内にいることは確かだと思うのだが、まだ寝ているのだろうか?

「はかせ、失礼しますよ」

ノブを回すと、案の定施錠はされていなかったようで、ガチャリと音を立ててドアは開いた。

相変わらず、紙類の散乱した研究室内はカーテンが締め切られて薄暗く、おれは電灯のスイッチを入れて明かりを確保した。

はかせは、ソファに身を投げ出して眠っていた。片方の手が縁からはみ出して床についており、とても寝やすそうな姿勢とはいえないが、よほど疲労が溜まっていたのか、はかせはベトベトンのように眠ったままぴくりともしない。

おれははかせを起こそうと思い、
「はかせ、こんなところで寝ていたら、腰を悪くしますよ」
それでも起きないはかせの体を、今度は両手で揺すって、強く呼びかける
「はかせ、起きてください」
すると、ばちり、と音がしそうなほどの勢いではかせが目を開け、がばっと身を起こした。周囲をきょろきょろと見回し、おれを発見すると、おれが何か言うより早く、摑みかかるようにして叫んだ。
「完成した！」
「は、はかせ。どうしたんですか、急に？」
「聞いてくれ、少年！　完成したんだよ、『テレパシー装置』が、ついにできたんだ！」

要するに、そういうことらしい。
はかせはここ数週間の没頭の末に、ようやく彼の研究目標である、外付けの精神感応補助装置「テレパシー装置」を形にすることに成功したのだ。
「すごいじゃないですか、はかせ！」
「うむ、ありがとう」
はかせはいつもの五割増しくらいの笑顔で、にこにこにことしている。全身から溢れ

んばかりの上機嫌だった。
「それで、その装置はどれですか？」
「これだよ」
　そう言ってはかせが差し出した装置は、奇妙な形をしたヘッドギアのようなものだった。ポケモンに被せて、ほかのポケモンの戦闘経験を追体験させる「がくしゅうそうち」と似た形状で、いくつもの球形アンテナが飛び出ている。人の頭に合わせたものと、ポケモン用のとの二種類があるようで、二つ一組で使うもののようだった。
「片方を人間が、もう片方をポケモンが着用して使うんだ。それぞれの装置が使用者の深層意識を読み取り、装置間では精神感応の経路が結ばれる。理論上はどんな人間とポケモンの組み合わせでも、これでテレパシーを送受信することができるはずだ」
　はかせは興奮した様子で、早口で説明をまくし立てる。
　よく見ると両目の下には濃いクマが広がっており、髪は長い間洗髪していないためかボサボサで、肌もどことなく青白い。もともと小柄な見た目と相まって、生命感が希薄になっていた。
　きっと徹夜で、何日も装置の開発に没頭していたのだろう。おれははかせを宥め、とりあえず一度寝かせることにした。はかせがシャワーを浴びている間にタオルと着替えを用意し、はかせがシャワーから出ると寝室に連れて行く。

ベッドに入った後もはかせは気分が落ち着かない様子で、目を爛々と輝かせながら、しきりにおれと話そうとした。いつも穏やかなはかせの豹変した様子に、おれは気圧されてしまう。
「少し休んだら実用実験を執り行うんだ。少年、きみにはぜひ実験を手伝って欲しい」
「えっと、実際にポケモンと精神感応するということですよね。でもぼく、何の役にも立てないと思いますけど」
「いや、手伝いと言っても、何か難しいことをしてくれというわけじゃない。側で見届けてくれるだけでいいんだ」
「まあ、見ているだけでいいなら……」
本当なら今日のうちにでも研究所を発つつもりだったのだが、はかせをがっかりさせたくないという気持ちが働いて、おれは気づいたら出発の日取りを延期していた。
おれが了承すると、はかせはほっとした様子でひとつ息をついた。
「誰で実験するか、決めているんですか？」
「ああ、うん。実験するのはぼくと……。そうだね、もう決めているんだけど、実験のときに話すことにするよ」
それだけ言い終えると、はかせはすぐに寝息を立ててしまった。

★★★

はかせが向かった先は、研究室でも実験室でもなく、研究所の最奥に位置しているまだおれが入ったことのない部屋だった。

というのも、この研究所に来た初日、はかせに研究所を案内される途中ではかせがおれに「この部屋には入らないでね」とわざわざ念を押した部屋だったのだ。部屋の掃除をするときも、おれははかせの言いつけを守り、この部屋に近づいたことはなかった。いわば、この研究所の「開かずの間」だったわけだ。

はかせはその部屋のドアの前に立つと鍵を取り出し、ガチャガチャと音を立てて解錠する。

「入っていいんですか?」

思わず訊くと、はかせは振り返って、

「うん。この中にいるポケモンと、テレパシー実験をするんだ」

おそるおそる足を踏み入れたその部屋は、研究所のどの部屋にも増して「明るい」部屋だった。四方の壁紙はおろか床や天井に至るまで、ステンドグラスのようなカラフルで不規則なパターンがあしらわれており、非現実的な雰囲気を醸し出している。

インテリアは少なく、部屋の中央に設置されたポケモン用の小型ベッドの他には、い

くつかクッションが転がっているだけだ。ほかの部屋の散らかりっぷりからすると殺風景とも言えるほど整然と片付いていて、はかせの部屋の主に対する思い入れのほどがうかがえた。

その、部屋の主――ポケモン用ベッドの上で丸まって眠る一匹のポケモンが、きっとはかせの言う実験対象なのだろう。

ピンク色の体表を持ち、頭部からは同じくピンク色のけむりを黙々と吐き出している特徴的なポケモン。そのポケモンは、ムシャーナだった。

ゆめうつつポケモン、ムシャーナ。イッシュ地方に生息するエスパータイプポケモン「ムンナ」の進化形で、人やポケモンの見る夢を食べるというかなりユニークな特徴を持つポケモンだ。おれの故郷のサンヨウシティからほど近い、「夢の跡地」と呼ばれる廃研究所では、ムンナがよく出没していたということもあり、おれにも馴染みのあるポケモンだった。

「――メア」

いつか、日誌（レポート）で見た固有名詞を、はかせがつぶやく。

このムシャーナが「メア」なのだろうか。はかせの最初のポケモンで、共に旅をしたというあの？

ムシャーナがベッドの上で身じろぎをし、目を瞑ったままふよふよと浮かび上がる。

ムシャーナは基本的に瞑目しているポケモンで、覚醒と睡眠の境界が存在しないとも言われている。常に夢を見つつ、目覚めてもいるポケモン。ムシャーナはいわば、夢と現実のはざまに生息しているポケモンなのだ。

とはいえ、今のムシャーナはどちらかといえば覚醒寄りの状態だろう。先ほどよりも意識がはかせとおれに向いているのを直感的に理解できる。

「ああ、いいよ。そのまま、無理はしないで」

はかせは、彼の声に反応したムシャーナを制止して、その頭部にポケモン用のテレパシー装置を装着していく。

「少しくすぐったいかもしれないけど、我慢してね」

その手つきは過剰なほどに丁寧で、はかせがムシャーナを大切に思っていることが伝わってきたが、おれは同時に違和感を覚えていた。はかせのムシャーナに対する態度は、おれがコジョンドに向けるような対等な相棒に対するものというよりは、親が子を慈しむようなものだったからだ。

「少年、それを渡してくれ」

はかせに言われ、おれは手に持っていた人間用のテレパシー装置をはかせに手渡す。手早く装置をつけ終え、はかせはムシャーナの正面に座り込む。これで実験の準備は、全て完了だ。

「はかせ」
「うむ、それでは、――これより実験を開始する」

はかせの宣言から、しばらく沈黙の時が流れた。
おれは壁際に立って、少し緊張しながら実験の成り行きを、見つめ合う一人と一匹の姿を見守っていた。
チクタク、チクタクと、部屋にかけられた壁時計の針の音が、やけに大きく聞こえる。部屋には厳粛な雰囲気が漂い、この場ではどんな音も、神聖な静謐を汚す行為のように思えてくる。
おれは唾を飲み込むのもはばかられて、息を吐くのにさえ細心の注意を払わねばならなかった。
はかせは、瞬きもしないで宙に浮くムシャーナを見上げている。胸の中で一心に何かを訴えようとするその姿は、場の空気も相まって神に祈りを捧げる敬虔な信徒のようにも見えた。
五分を経過したあたりから、おれは胃腸が引きしぼられるような感覚を味わっていた。
果たして、テレパシーは繋がっているのか。実験は成功なのか。それとも、時間がか

かって当たり前なのか。

はかせもムシャーナも相手から意識をそらそうとはしていないけれど、活発なコミュニケーションが交わされているようにも見えない。

うまくいってほしい。はかせの努力が報われてほしい。

この二ヶ月間、おれは一番近くではかせの研究する姿を見てきた。寝ても覚めてもテレパシーのことを考えていて、本当に研究が好きなんだなと思っていたけれど、今ならそれだけではないと分かる。

はかせがあれほど熱心になってテレパシーの研究に打ち込むことはできていたのは、きっとムシャーナのことをそれほどまでに愛しているからだ。研究者の好奇心だけでは説明できない、あの鬼気迫るような努力は、きっとムシャーナへの思いから来たものだった。

うまくいってくれ。繋がってくれ。

おれは心の中で祈って、直後にそんなことをしている自分に驚く。

スクールから人よりもポケモンと接して生きてきたおれが、まさか他人のために祈ることになるとは。しかも、二ヶ月一緒に過ごしただけの、年齢の離れた奇妙な老人のために。その程度には、おれはこの老人に敬意を抱いているということだろうか。

チクタク、チクタク。

時間は経過する。
はかせは、決して目を逸らさない。ムシャーナも、はかせから意識を外そうとはしない。
繋がっているのか、いないのか。じりじりとした焦げ付くような沈黙が、肌を焼く。
しかし――。
目だけを動かして、おれが壁時計を見た。すでに開始から三十分が経過していた。全てが静止したような部屋のなかでは、無限にも等しい体感だった。
限界だ。流石にそろそろ、声をかけるべきだ。
おれはそう判断して、声を出そうとした、そのとき。
ばっ!!　と、白衣の裾を翻して、急にはかせが立ち上がった。
「は、はかせ……？」
はかせは俯いていた。被ったテレパシー装置が陰を作って、表情は見えなかった。
はかせは震えていた。雪の寒さに耐えるように、静かに震えていた。
おれは、はかせを呼び止めようと思った。だけど、おれが動き出すより先に、はかせは荒々しい足取りで、開かずの間を後にした。
おれは呆然とはかせの背を見送った後、ムシャーナの方に目をやった。
相変わらず閉じたその双眸で、彼女はじっと、はかせの残像を見つめているようだっ

た。

三話

テレパシー実験は失敗だった。

はかせはムシャーナと、テレパシーで繋がることはできなかった。装置は正常に作動していたにも関わらず、はかせはただの一言も、自らの心の声をムシャーナに届けることはできなかったのだ。

はかせは、この結果に相当ショックを受けたようだった。

おれは、はかせは自分が完璧だと思っていた装置が完璧でなかったことにショックを受けたのだと思っていたが、どうやらそうではないようだった。原因が分からなければ、おれも慰めることはできない。

はかせはそのその日以降次第に元気を失っていき、活動的ではなくなっていった。四六時中ぼおっとしていることが多くなり、毎日行っていた研究もせず、テレパシー装置を持ってムシャーナの部屋に入り浸ることもしばしばだった。まるで一気に十年くらい歳をとってしまったみたいで、少年のように目をきらきらと輝かせてテレパシーについて熱弁を振るっていた彼とは、別人のようだった。

おれはそんなはかせを、見ていられず、出発の日取りをさらに延長して研究所に留ま

ることにした。

しかし、おれの努力もむなしく、はかせは日を追うごとにムシャーナの部屋から出てこなくなり、やがて一日中閉じこもるようになってしまった。研究所に残ることを決めたところで、おれがはかせのためにできることは多くなかったのだ。

なぜおれはこんなにも無力なのだろう。はかせに元気になって欲しいだけなのに、そのささやかな目標はいまのおれにとって果てしなく遠いものに見えた。

理由は、わかりきっていた。おれがはかせのために何もしてあげられないのは、はかせという人間のことを、おれが何一つ知らないからだ。

結局、それが答えだった。おれははかせのことを何も知らない。はかせがなぜ大きなショックを受けているのかも知らないし、はかせがなぜテレパシーを研究していたのかも知らない。なぜほかのポケモンはモンスターボールに入れているのに、ムシャーナには部屋を与えているのかも、なぜおれみたいな生意気な少年を助手という名目で研究所に留まらせてくれているのかさえ、おれは知らないのだ。

せいぜいが、物置きにあった旅の日誌を盗み見たくらいで、おれははかせの内面についてあまりにも無知だった。ポケモンバトルでもそうだが、知っているということは大きな力だ。翻って、無知とは無力なのだ。だから、おれがすべきこととは、まずは自分の無知を自覚することだ。

おれははかせの何を知っているのか？
バッジを八個所有するエリートトレーナーであること。テレパシーの研究をしていること。研究内容のことになると話が長いこと。片付けが苦手なこと。陽気な性格で、バトルが趣味であること……。
どれも薄くて軽い情報ばかりだ。知ろうと思えば誰でも調べられる程度の、表面的なことばかり。上部だけのデータなど、いくらあっても今この場では役に立たない。
ならば、問いを変えよう。おれははかせの何を知る必要があるのか？
決まっている。彼の本質の部分だ。つまり、彼の欲望だ。はかせは本当は何が欲しくて、それはなぜなのか。彼が胸の内側に抱えている原動力を知らねばならない。
そのためには、いくら遠くから眺めていても仕方がない。
レントラーの巣穴に入らずんばコリンクを得ず。
大切なことは、本人に直接訊くしかないのだ。

おれはムシャーナの部屋から出てきたはかせを捕まえて、リビングルームで向かい合った。憔悴した様子のはかせを真正面から見つめて、単刀直入に問いかける。
「はかせ、本当のところを教えてください」
「……どうしたんだい、急に、改まって」

「あなたが、そこまでしてテレパシーの研究にこだわる理由です。おれには、あなたが純粋な興味だけでその研究をしているようには見えません。何か、別の理由があるんですよね？」
「なぜ、そう思う？」
「はかせ自身の言葉です」
「ぼくの言葉？」
「おれをここに連れてきた日、あなたは言いました。研究者にとって失敗は苦痛ではないと。失敗は前進と同じ意味なのだと。でも、今のあなたはまるでバトルに負けたトレーナーのようです。前に進むことを諦めて、うずくまってしまっている敗者のようだ」
「……なるほど。よく覚えていたね、そんな世間話を」
「スクールの授業と違って、あなたの話は面白かったですから。少し長いのが玉に瑕ですけど」
「……そう、か」
「はかせ、気づいていますか。今のあなた、今にも死にそうな顔色をしていますよ。あの日からずっとそうです。ろくにご飯も食べないで、このままでは本当に死んでしまう。おれはそんなのごめんですよ。はかせ、お願いですから、はぐらかさずに本当のことを

教えてください」

最後の方は声が震えて、うまく言葉にできなかった。

おれは、生まれて初めて誰かに心の底から懇願をしていた。スクールのクラスメイトはおろか、両親にだってこんなに真剣になって何かを訴えた経験はない。本気で人と接するということが、こんなに怖くて緊張するものだなんて、おれは全く知らなかった。

「……」

「はかせ!!」

なおも黙りこくるはかせに、おれは思わず大声をあげていた。

おれははかせの肩をつかんで、言い募った。がりがりに痩せて骨と皮だけになった肩はいかにも頼りなく、なにかの拍子に壊れてしまいそうだった。

「お願いです。あなたの力になりたい。おれはあなたの話を聞いて、すごい人だと思った。尊敬できる人だと、おれには想像もつかない世界を知っている人だと思ったんです。でも、今のあなたはそうじゃない。弱々しくて、とても見ていられない。今のあなたには、他人の助けが必要なはずです!」

胸の奥から、伝えたいこと、言わなければならないことが、「いわなだれ」のように押し寄せてきて、それらを全部吐き出してしまうまで、おれは自分の口を閉じることができなかった。

言いたいことを全部言い終わって、おれが息を整えていると、はかせが弱々しく笑って言う。

「参ったな……」

ずっと合わせようとしなかった視線を合わせて、目元に力を込めて。

「少年、ぼくはきみのことをずいぶんと見くびっていたようだ。今時らしい斜に構えた子だと思っていたが……」

息をひとつ、ふう、と吐いて、口角を上げて。

いつもとは違うぎこちない作り笑いで、はかせが言う。

「誠意には誠意で応えないといけないね。少し長話になるだろうけど、聞いてくれるかい？」

おれは黙って、こくりと頷いた。

★★★

「ぼくとメア……ムシャーナが初めて出会ったのは、ぼくが五歳の頃だった。当時のぼくはカラクサタウンという田舎町に住んでいて、父と一緒に野生のポケモンが出る草むらによく遊びに行っていた。父の助けを借りて、ぼくが初めて捕まえたポケモンが、当

時はまだムンナだった、メアだったんだ。

　ぼくとメアはそれから、四六時中一緒に過ごすようになった。ぼくはメアを滅多にボールに戻さず、妹に接するように親しんだ。彼女もまた同様に、ぼくを気に入ってくれていた。ぼくらは初対面のころから、不思議なほどにフィーリングが合っていた。思えばこの頃から、ぼくと彼女は無意識のうちにテレパシーで繋がっていたのだと思う。例えるなら、そうだね……。きみの周囲に、双子はいるかい？」

「スクールのクラスメイトには、何組か双子がいました」

「結構。その何組かを思い浮かべてもらうとわかりやすいと思うんだが、双子というのはほかのどんな人間関係とも違う独特な関係だよね？　親や友人とも違う、完全に同じ遺伝子を分け合った者同士な訳だから。そして、双子には往々にして心の底で通じ合っているような特別な繋がりを見出すことができる。ホウエン地方にあるトクサネジムのジムリーダーなんかは、互いの心を読み合うような連携で精緻なダブルバトルを展開するというけれど、まさにそういった共鳴し合うような関係が、ぼくとメアにもあったんだ。ぼくらは言ってみれば、種族違いの双子だったわけだ」

「種族違いの双子、ですか」

「ああ。いや、むしろ一心同体と言った方がいいかな。ぼくらは互いに互いのことを、己が半身だと思っていた。生物としての『周波数』が合っていたんだね。人にもポケモン

にも個体ごとに存在する、性格だとか好みだとか雰囲気だとかの細かい要素を決定づけている因子が、抜群に相性が良かった。そういうこともあって、ぼくは故郷じゃバトルは負けなしだったよ。ポケモンと深い部分で通じ合えるということは、より複雑な指示をよりスムーズに通すことができるということだからね」

おれはそこで自身のスクール時代を連想し、こくりと頷いた。

「今だからわかることだけど、ぼくはおそらく天然の感応者だったんだ。そのころはポケモンとの関係はそれが普通なんだと思っていたけれど、振り返ってみればぼくとメアの息の合い方は明らかに異常だった。十歳になったころには、カラクサタウンにぼくたちに敵うトレーナーはいなくなっていた。

ぼくとメアは自分たちの限界を試したいと思って、武者修行の旅に出た。各地のジムを巡り、ジムバッジを集める。そして、いつかはポケモンリーグにも挑戦する。あまりに漠然とした将来設計だったけど、当時のぼくらは不可能だとは考えていなかった。長い戦いになるだろうとは予想していたけれど、それでもいつかは頂点に立てる日が来るだろうと思っていたんだ。

ぼくらは順調に旅を続けて、ジムバッジを一つずつ集めていった。旅の過程で仲間も増えていったけれど、ぼくが最も深く繋がれるのは、相変わらずメアだった。不思議なことに、ぼくの感応者としての才能はメアと繋がることだけに費やされていたみたい

で、メア以外の手持ちポケモンとの関係はいたって普通だったんだ。トレーナーとしての才能も、よくて並だった。戦術も知識も平々凡々としたものでしかなくて、だから、格上のトレーナーに追い詰められることもしばしばだった。それでも、どんなに苦しいバトルでも、メアを繰り出せば勝てないなんてことはあり得なかった。

メアとぼくなら、どんな相手にだって勝てる。ぼくとメアは天に選ばれた組み合わせなんだ。ぼくはそう思って、どんどんバトルにのめり込んでいったんだ」

はかせはそこで一度、カップに入った水を飲んで喉を湿らせた。瞳を揺らし、後悔の念に耐えながら、慎重に言葉を探っているようだった。

「……最初は、自分の可能性を試すことが第一だった。窮屈な田舎町から抜け出して、思い切り羽を広げて飛ぶことができればそれで良かった。ポケモンリーグという目標を掲げてはいたけれど、空気に流されて掲げていたというところが大きかったような気がする。チャンピオンという肩書きに憧れていたというよりは、多分、ポケモンとの絆を力に変えてそれで生計を立てるっていう在り方に憧れていたんじゃないかと思う。

だけど、当時のぼくはそういう自分の願望の細かい部分までは考えようとはしなかった。ぼくとメアに敵うやつはいないのだから、とりあえず進んで、つまらなそうだったらやめればいいと考えていた。そうして行き当たりばったりを繰り返していれば、いつかぼくの理想通りの場所にたどり着けると思っていたんだね。そのくらい、ぼくは完全

に感応者の才能に頼りきりになっていた。才能に酔っていたとも言えるかな。それが絶対だと思い込んで、ほかの全てを疎かにしていた。その絶対性が崩れたとき自分がどうなるかなんて、考えもしなかった」

「旅に出てから二年が経って、ぼくは全てのジムバッジを集め終えた。その頃になってもぼくとメアのコンビネーションは未だに無敗で、ぼくは期待の天才ポケモントレーナーとして周囲から散々もてはやされていた。やっかみも当然あったけど、それ以上の称賛と羨望を向けられて、ぼくは気分がよかった。いつのまにか態度は尊大になって、生意気だと陰口を叩かれても、ならば実力で黙らせてみろとまで言うようにまでなっていた。思い出すのも恥ずかしい、ぼくの一生の汚点さ。あのときのぼくは、おそらくイッシュで最も嫌味なクソガキだっただろうね。でも、才能にあぐらをかいた勝利が、いつまでも長続きするわけはない。ましてや、ぼくは十二歳の子供でしかなかった。勝負の世界というものを理解しきれていない素人でしかなかった。だから、ぼくはその分大きな『しっぺがえし』を受けることになった。——チャンピオンロードでのことだ」

気づくと、はかせの細い手はふるふると細かく震えていた。表情は苦痛に歪み、瞳も記憶を掘り起こすことを拒否しているかのようにせわしなく揺れている。彼は、自分の記憶に怯えているようだった。

「ひとりのトレーナーに、出会ったんだ。背の高い男だった。黒いコートを着ていた。

眼光鋭く、歴戦の強者だと一目でわかる雰囲気を持った、誇り高い戦士のような男だ。何が発端だったのかは思い出せない。ぼくらはチャンピオンロードのど真ん中でバトルをすることになった。

その頃のぼくは方々に名が売れていて、放っておいても多くのトレーナーにバトルを挑まれる身だった。嫉妬から挑んでくるものもいたし、ぼくに憧れていると言ったトレーナーもいた。ぼくはその全てを返り討ちにしていた。当時のぼくは、男もその中にひとりでしかないと思っていたんだ。

バトルが始まると、いつもとは状況が違うことに気づいた。ぼくの放つ策が、放つ前からことごとく潰されていく。まるで未来を見ているかのように、あるいは思考を読んでいるかのように、彼はぼくのポケモンたちを冷徹に着実に沈めていった。気づいたときにはぼくの手持ちはメアだけになっていて、でも、そのときはまだ余裕があった。メアさえ残っているなら、ここからいくらでも巻き返せる。それまでの経験則がそう励ましてくれたからだ。

だけど、男は一筋縄ではいかなかった。ぼくとメアに正面からでは敵わないと見るや、あらゆる搦め手を行使してメアにプレッシャーをかけ始めた。状態異常、弱体化系の技、固定ダメージ戦法や持久戦術まで、本当に恥も外聞もなくあらゆる手段を使って、メアという一匹のポケモンを全力で仕留めに来ていた。

初めて味わう怖さだった。男は、ぼくがこれまで戦ったどのトレーナーよりも泥臭く勝利に執着していた。彼だけじゃない。彼のポケモンもそうだ。彼のポケモンたちは皆ギラギラと目を輝かせて、メアを倒すことに命を賭けているようだった。

ぼくはその有様に恐怖し、それがメアにも伝染した。それがトリガーとなって、全てが崩れ始めた。今度はメアの恐怖がぼくに流れ込み、それが原因でぼくの中にさらに大きな恐怖が生まれる。一度負のスパイラルが始まったら、簡単には止まらない。ぼくとメアの間で恐怖の感情は加速度的に膨張し、ぼくから判断力を奪い、メアの機動力を麻痺させた。

「トレーナーとポケモンが精神感応で繋がった影響で、特定の感情が二者間で急激に増大することがある。『感情暴走』と呼ばれる、感応者に特有の現象だ。ぼくはこのとき初めてそれを経験した。何が起こっているのかすら把握できず、ぼくは混乱してしまった」

「早急になんとかせねばならない。目の前で、メアはついに男のポケモンにクリーンヒットをもらってしまっていた。ぼくは焦って、とにかくまずは判断力を取り戻すことが先決だと考えた。恐怖が流れ込んでくる頭の回路を閉じる。そうすれば、再びメアに冷静に指示ができるはずだと思った。ぼくは自分の頭の中のチャンネルというチャンネルを、めちゃくちゃに弄り回した。もちろん、あくまで感覚の中でそういうイメージ

だったというだけで、実際に脳をいじったわけではないけれど、ともかくその試みは、成功を見た。ぼくとメアを繋いでいた経路が切れて、ぼくは判断力を取り戻し、――引き換えに、五歳の頃に出会ってからずっと繋がっていたメアとのテレパシーを、ぼくは失うことになった」

「切った直後に、ぼくは直感的に理解した。今ぼくが切ってしまったものは、実はとても大切なものだったのだということを、心の奥で理解していた。一度切ったチャンネルは、二度と繋がらなかった。ぼくらのコンビネーションはがたがたになった。ぼくとメアが以心伝心だからこそ可能だったいくつものとっておきの戦術も、もう使えない。ぼくらはそのとき、すでに天才ポケモントレーナーとその相棒ではなくなっていた。そうなるとぼくは一介の、ただバトルが上手いだけの無個性なトレーナーでしかなかった。そんなやつはチャンピオンロードを見回せば、掃いて捨てるほどいた。男は急に弱くなったメアを訝しみながらも、何かの作戦かと疑い、徹底的に勝ち筋を潰す戦術で、周到にメアを痛めつけた」

「目の前でずたずたにされていく彼女を前に、ぼくは何をすることもできなかった。まともなトレーナーがそうするように、回避や防御を指示することも、パニックに陥った彼女をなだめることも、『降参』を宣言する事さえも。あのトレーナーが自分の判断で攻撃をやめてくれていなかったら、彼女はほんとうに、あのとき死んでしまっていたかも

しれない」

『スクールのガキでも降参くらいは言える。お前は本当に、バッジを八つ集めたトレーナーなのか？』

「勝負が終わった後、あのトレーナーがぼくに投げかけた言葉だ。ぼくは何も言い返すことが出来なかった。彼の言っていることは、この上なく正しかったからだ。

ぼくがあのときすべきことは早々に降参を宣言することだったはずだ。勝ち負けよりも彼女の安否を優先するのなら、それが正答だったはずだ。なのに、ぼくはとっさにその判断が下せなかった。そしてぼくは、そのトレーナーから逃げ出すようにして、チャンピオンロードを降りた」

★★★

「メアは、ポケモンセンターに長期入院することになった。ドクターが言うには、メアは急所に深手を負っていて、完治は難しい状況だった。例え退院できたとしても、もう一生バトルをすることはできないだろう、と言われて、ぼくはぼくの中で、あんなに楽しかったバトルへの情熱が、急速に萎んでいくのがわかった。

ぼくはバトル自体が好きだったのではなくて、メアと一緒にするバトルが好きだった

ということに、ようやく気づけたんだ」
「ぼくはトレーナーをすっぱりと引退して、故郷に戻った。ポケモンセンターからメアを引き取り、自宅で世話を続けた。医療系のポケモンブリーダーに預けることも提案されたけれど、自分の半身として育った彼女を、人の手に委ねるのはどうしても気が進まなかった」
「トレーナーをやめてしばらくは、解放感があった。どんなに自信があっても、勝負事にはストレスがつきまとう。トレーナーを引退して、気を張り詰めなくてもよくなったぼくは、しばらくはのんびりと過ごすことができた。だけど、時が経ち、解放感がだんだん薄れていくにつれて、代わりに胸の中には寂しさが居座るようになった。いままでずっとメアが埋めてくれていた部分にぽっかりと空きができて、そこを寒々しい風が吹き抜けていくんだ。彼女と繋がっていられないのがどうしようもなく心細くて、夜も眠れなくなった。彼女が生きてさえくれればそれでいい。何度もそう自分に言い聞かせたけれど、彼女の心と繋がれないことの空虚感は心に穴をあけて、その穴は日に日に大きくなっていった」
「ある日、ぼくはとうとう耐えきれなくなって、両親に全てを話して学校に通わせてくれと頼み込んだ。研究者になるためだった」
「なぜ、研究者に？」

「チャンピオンロードでの試合でメアとの繋がりが切れたあと、ぼくはそれをどうにか戻す方法はないかと探し回ったんだ。書籍を読み漁り、その筋の研究者を訪ね歩いて得た結論は、現状その方法は存在しないというものだった。携帯獣心理学は人気の高い学問とは言えず、さらに精神感応の分野ともなると専門の研究者は数えられるほどしか存在しなかったからだ」

「それで、はかせ自身がその方法を見つけようと思った……」

「そうするしかなかった、という方がより正しい。幸いにも、トレーナーとして旅をした二年間で知り合った人たちから、色んな援助を受けられた。ぼくは大学を卒業して、研究に必要な環境を整えることにも成功した。そういう意味では、研究者としてもぼくは恵まれていた。研究活動の過程でかけがえのない友も何人もできたし、ポケモンたちとの出会いもあった。色んな地方を巡って、色んなトレーナーに話を聞いた。研究は進み、ぼくは前に進んでいった。

……白状するとね、テレパシー装置の試作機というのは、あれが初めてではないんだ」

「そうなんですか?」

「うん。これまで、百近くは試作したかな。その度に助手を雇って、実験を手伝ってもらったよ。もしも実験がうまくいったとき一人で彼女の心と向き合う勇気がなかったから、試作機の完成が近づくと外に出て、旅のトレーナーに声をかけるんだ」

「そうだったんですか……」
「だけど、それも今回で最後だ」
「なぜですか？今までも何度も失敗してきたのに、なぜ今回に限って諦めてしまうようなことを」
「……何度考えてみても、今回のテレパシー装置は完璧だったはずなんだ。ぼくの五十年の集大成だった。今回でだめなら、もうぼくにこれ以上のものは作れないと直感していたんだよ。今回こそはと、本当に久しぶりに期待したんだ。だけど、だめだった……。装置に原因があるのか、それとも彼女が心を閉ざしているのか、どちらだとしても、ぼくにはこれ以上手の施しようがない」
「だから、それは諦める理由には！」
「――寿命なんだ」
　時が、凍りついたようだった。
　おれはその言葉の意味を咀嚼するのに数秒をかけ、それでも飲み込みきれずに、はかせに訊ねた。
「いま、なんて？」
「寿命なんだ、彼女。ドクターが言うには、もともと後遺症の影響で長くはないはずだったけど、もういつ死んでもおかしくないらしい」

ぼくは応える言葉を持たず、目を見開いたまま無様に固まってしまった。

「彼女ともう一度だけ、心で繋がって話すことができたら。あの時のことを謝ることができたらと思って、今まで研究を続けてきたけれど、ぼくにはそれは過ぎた夢だったらしい。たくさんの人とポケモンに助けられてきたけれど、彼らに報いることも、もうできそうにない。全く、情けない限りだよ」

弱音と自虐は、精神の猛毒だ。はかせはいま、弱り切っている。最後の希望であったテレパシー装置ではメアと心を繋ぐことは出来ず、制限時間が迫る中で、もうこれ以上自分にできることはなにもないと諦めてしまっている。

おれは、彼の本音を聞くことは出来た。それで、次は？　本音を聞き出すことに成功して、その次はどうなる？　おれに一体、何ができる？　半世紀の間戦い続けて、傷つき、弱り果ててついに膝を屈してしまったこの老兵に、おれは何と言葉をかけてやるのが正解なんだ？

「――……」

分かりきったことだ。おれにかけられる言葉なんてない。この人の半分も人生を生きていないおれみたいな若造が、ここでどんな言葉をひねり出そうと、そんなもので救われるほどこの人が抱えているものは軽くない。

立ち尽くすしかないおれに、はかせは弱々しい笑みを向ける。

「ありがとう。やっぱり人に話すと全然違うね。少し気分が楽になったよ」

そんなの嘘に決まっている。この人はいま、おれを励まそうとしている。満身創痍で今にも死にそうなこの老人は、この期に及んで自分ではなく他人の心配をして、おれに負担を押し付けまいとしているのだ。

唐突に、胸の内側に火傷しそうなほどの怒りが湧いた。何に対するものなのかは定かではない、衝動的で無秩序な怒り。今すぐ何かに向かって叩きつけて発散しなければ、気が狂ってしまうかもしれないという予感がして、でも、おれにはこの怒りを手放す資格はないのかもしれない、という気もする。おれは拳で何かを殴りつける代わりに、痛いほど両手を握りしめて、怒りがおさまるのを待った。

そして、決めた。

出発はやめだ。おれには、ここでやり残したことが多すぎる。

★★★

翌日から、おれははかせに許可をもらって、はかせの研究室の資料を読み漁り始めた。

はかせ自身が掻き集めた携帯獣心理学の専門書や、はかせが自分で書いた論文。研究室を埋め尽くすほど積み上げられたそれらを、はかせの努力の軌跡を追うようにひとつ

ひとつ紐解いていく。

幸いにも、精神感応に関する基本的な知識を手に入れるのはさほど難しい話ではなかった。五十年の研究の末にはかせが纏めた論文はどれも読みやすく工夫されており、膨大な参考資料を無視してはかせの論文に集中すれば、それで基礎は出来上がるということに気づいたからだ。

問題はそのあとだった。

はかせとメアがテレパシーできない原因を特定するには、仮説を立ててひとつずつ検証していくしかないが、おれが思いつく程度の仮説は、そのことごとくがはかせの手によって反証済みだったのだ。

当然といえば当然だが、ひとつの研究に五十年もの歳月をかけた専門家に、一介の素人が一朝一夕で追いつけるわけはない。注意すべきなのは、はかせはそれでも、メアと心を繋ぐことはできなかったということだ。

それは、単にはかせの挑んだ課題が、五十年という時間では解決できないほど難しいものだということを意味しているのか。あるいは、どこかに見落としがあって、それさえなんとかすればクリアできるものなのか。仮に前者だとしたら、もうおれができることなんて、ほとんど残っていないだろう。はかせとメアが穏やかに最後の時間を過ごせるように、早々に研究所を立ち去ることくらいだ。

しかし、後者である可能性がわずかでも残っているのなら、おれはその可能性に賭けたい。ああ、そうだ。意味なんて無いのかもしれない。こんな努力をしても、もうとっくに世界のどこかで運命は決まっていて、何もかも手遅れで、次の瞬間にもメアに最期の時が来てしまうのかもしれない。おれのあがきは、何の実も結ばない徒労になるのかもしれない。だけど、そうだとしても。今はまだそうなっていないのだから、諦めることなんてできるはずもない。

かたわらで、未読の資料と既読の資料をより分けてくれているコジョンドを見やる。彼と最初にあったのは、夏休みに祖父の家に遊びに行ったときのことだった。ポケモントレーナーだった祖父に連れられて、草むらに入り、祖父のポケモンを借りて飛び出してきたコジョフーとバトルをし、自分でボールを投げて捕まえたのだ。

初めて自分でゲットしたポケモン。旅を始めてからも、ずっと一番の相棒だったポケモン。はかせにとってのメアは、おれにとってのコジョンドだった。

もしコジョンドが不治の病に侵されて、次の瞬間にでも死んでしまうかもしれないとドクターに宣告されたら？　おれはその場面を想像し、胸が張り裂けるような痛苦に襲われた。耐えがたい悲劇だ。いまはかせが見舞われているのは、そういう状況なのだ。

「……そうだ、諦めるなんて、できるわけがない」

おれは両手で自分の頬を張り、気合いを入れ直した。

思考を切り替えろ。発想を逆転させろ。

おれはこれまで、はかせの論文を読み漁り、はかせと同じ文献を参照してはかせと同じように問題に対してアプローチしてきた。いわば、はかせの後追いをしてきたに過ぎない。だけど、それではだめだ。はかせと同じことしかしていないのでは、遅かれ早かれはかせと同じ結果になるのは目に見えている。努力の量では、五十年のアドバンテージを持つはかせに追いつけるはずもない。ならば、おれがすべきことは、努力の質を変えることだ。はかせの努力に欠けた部分を補うように、はかせと異なる視点から異なるアプローチで回答を導き出すことだ。

はかせが見たことのないもの。あるいは、はかせが忘れてしまっていたもの……。

頭をよぎったのは、物置きの奥でほこりを被って眠る、日誌（レポート）の束。

「そうだ、はかせの旅の日誌」

あれならば、はかせとメアについてなにかおれの知らないヒントを与えてくれるかもしれない。前回読んだときは斜め読みだったし、テレパシーについての知識も持っていなかった。今読み返せば、何か見えてくるものがあるかもしれない。

おれは研究室を飛び出して、研究所の隅にある物置き部屋へと走る。一分一秒が惜しい。メアの命があとどれだけ持つかは、誰にもわからないのだ。はかせの気持ちを思えば、時間を無駄はできない。

物置きに入り、例の古びたダンボールを見つけると、おれは両手でそれを抱えてすぐに来た道を戻る。廊下を小走りに渡る途中で、視界に開かずの間のドアが入った。今日もはかせはあの中で、一人でメアの世話をしている。心を繋ぐことはできなくとも、せめて最期の瞬間には立ち会いたいという思いからそうしている。自分の一番の望みを放棄して、最善の結果を諦めて、妥協してしまっている。

誰が責められることでもないだろう。はかせが今まで積み上げてきら努力は、すべて彼自身の願いのためのものだったのだ。諦めたからといって、誰かに迷惑をかけるわけでもない。だから、はかせが諦めたことに関して、糾弾するようなことを言うのは完全に的外れだ。

だけど、ひとつの願いのために五十年もの時間を費やしたその結果がこれというのは、納得がいかないのも事実だ。だったら、おれが何とかする。自分の力で、納得のいかないものを納得のいく形に変える。それだけの話だ。

研究室に戻ったおれは、数冊に及ぶ分厚い日誌を、特にムシャーナの記述に注意を払いながら、冒頭から読み込んでいった。

五歳の頃から双子のように育った一人と一匹。彼らの間にあった関係がどういうものだったのか？　チャンピオンロードでの戦いで繋がりが失われたのはなぜなのか？

はかせが言うようにテレパシー装置に不具合がなかったのだとしたら、メアは本当に

はかせに対して心を閉ざしてしまったのか？

日誌の文章から、彼らの辿った旅路を頭の中で再現する。記述の足りない部分はおれとコジョンドの関係性を当てはめるなどして補完し、手探りをするように想像の枝葉を伸ばしてゆく、伸ばしてゆく、伸ばしてゆく……。

「――あ……」

そうしておれは、その「影」を捉えた。

四話

はかせの研究所に来てから、三ヶ月が経った。

後の一ヶ月は、おれはほとんどはかせの部屋で寝起きし、山ほどの書籍と終日格闘する毎日を送っていた。

部屋から出るのは食事のときくらいで、風呂にもろくに入っていなかったから、身体中がベタついていて気持ちが悪い。服はしわくちゃで、髪もボサボサ。鏡で自分の姿を見たときには、まるではかせの生き霊が乗り移ったみたいだと思って、少しおかしくなった。

方策は、一応の完成を見た。いや、まだ理論の段階でしかないので、完成とは呼べないだろうが、少なくとも何がしかの「回答」は出すことができた。専門家の目から見たら穴だらけの不完全なものかもしれないけれど、時間制限が存在することを考えれば、これ以上を望むべきではない。

コンコン、と軽く二回ノックする。開かずの間、メアの療養室。はかせはこの一ヶ月間、ほとんど外にも出ないで、この部屋でメアと寝食を共にしていた。

「入ってくれて構わないよ」

許可が降り、おれはドアを開けて部屋に入った。
はかせは一ヶ月前と変わらない姿勢で、メアの前に座っている。体はメアの方を向いており、入室してきたおれには背中を向ける格好だ。
「そろそろ、出発するのかい？」
はかせが背を向けたまま聞いてくる。
「長々と引き止めてしまって悪かったね。ねじ山も雪解けが終わって通過しやすくなっているだろう。セッカシティへの行き方は――」
「はかせ、テレパシーをしたいですか」
ぴたり、と。無理矢理流暢に動かしていたような、はかせの口が止まった。
「はかせ」
「少年。いま、何と言った？」
「彼女と――メアとテレパシーをしたいですか」
背を向けてままだったはかせが、ゆっくりとこちらを振り返る。
ぞくり、と悪寒が背筋を這い上がり、おれは思わず、その場から一歩後ずさった。
三ヶ月もの間顔を合わせてきて、おれは初めてはかせのことを「こわい」と思った。今までおれが見てきたどんな表情とも違う。おれが知っているどんな感情とも違う。はかせの双眸には、膨大な感情がぐるぐると渦を巻いていた。忿怒とも、期待とも、悲哀

ともつかない、あるいはそれらすべてをごちゃ混ぜにしたような感情の渦潮が、おれにはかせの存在を大きく見せている。ドラゴンポケモンに行き違ったかのようなプレッシャー。

いいや、臆するな。

おれは自分に言い聞かせた。

「はかせが彼女ともう一度テレパシーするための方法がわかりました。おれに任せてもらえるなら、はかせと彼女の関係を復活させてみせます」

取りようによってははかせに対する最大級の侮辱とも言える言葉を、あくまで平然と言い放つ。はかせの中に漂う無力感の霧を払うには、ここまで言う必要があるのだ。

だから、迷うな、ためらうな。

「どういった方法で？」

「バトルです」

「バトル？」

「はい、ポケモンバトルです。はかせはメアと一緒に、おれとコジョンドを相手にバトルをしてもらう」

「ばかな！」

「いいえ、本気です。はかせだってよくご存知のはずでしょう。ポケモンバトルは他の

どんな日常の場面より、人とポケモンの信頼関係が試される場面だということを。はかせとメアの間にテレパシーを取り戻させる最も単純な方法は、バトルをしてテレパシーが必要な状況を作り出すことです。事故で動かなくなった腕をもう一度動かせるようにするには、リハビリをするしかない。テレパシーも同様に、バトルを通してリハビリをするのが効果的なはずです」

「それは、理論上は確かにその通りだ。しかし、現実的な解決策としてはあまりに乱暴だ！」

「なぜ乱暴なのですか？　はかせはバトルの腕も確かだ。そのことはおれとあなたが出会った日に、ご自身で証明されたでしょう」

「だけど、彼女はもう戦える身体じゃないじゃないか！」

悲鳴のような反論は、想定されたものだった。おれは予め用意していた言葉を、不敵に笑いながら言い放つ。

「いいえ、それだけではないでしょう。はかせ、バトルを恐れているのは、本当はあなたの方ではないですか？」

「なんだって？」

「はかせ。あなたは、メアと共にバトルをし、チャンピオンロードでの敗戦を再現してしまうことを怖がっているのではないですか？　あのトラウマじみた出来事をもう一度

味わいたくない。だから、メアの状態を盾にしておれの仮説を退けようとしているのでは？」
「違う！そんなことはない。ぼくは彼女がもう一度ぼくと繋がってくれるならどんなことでも、」
「はかせ、では」
おれはそこで、一度大きく息を吸い込んだ。
「――もしもメアが傷つかずにバトルをする方法があるとしたら、あなたはバトルをしてくれますか？」
精神感応の正体を明らかにしようとしたはかせの研究の中に、こんなものがあった。ムンナ種をはじめとする、「夢」に関わる能力を保有するポケモンたちの考察だ。
ムンナ種のトレーナーは、たびたび睡眠中にムンナ種と自分だけの明晰夢を見ることがあるのだという。トレーナーは、すぐにはこれが夢であることに気づけず混乱するというが、はかせのこの現象に対する解釈はこうだ。
ムンナ種をはじめとするいくつかの種族には、人の深層意識に干渉して夢に影響を及ぼす能力があり、ムンナ種の場合には、まるで現実であるかのような明晰夢を見せることができる（おそらくこの明晰夢の能力が、夢現（ゆめうつつ）ポケモンという呼称の由来になっていると思われる）。トレーナーとじゅうぶんに絆を深めたムンナは精神感応により深層意

識をある程度共有できるので、トレーナーとムンナ種は共通のリアルな夢を見ることができる、と。

「つまり、VR……仮想現実（ヴァーチャルリアリティ）ですよね。ムンナ種とじゅうぶんに絆を深めたトレーナーは、ムンナ種と自分だけの仮想世界を体験することができる。これを利用すれば、メアを傷つけずにバトルをすることは可能です」

「どういう、ことかね」

「これです」

おれは、はかせの研究室から拝借してきた例のテレパシー装置を取り出した。人間用とポケモンの用の二つがあり、ポケモン用の方はおれのコジョンドに持たせていた。

「これを使って、おれとコジョンドがはかせとメアの明晰夢の中に入り込みます」

今の時点からおれやコジョンドがムシャーナと絆を深めて明晰夢に招待してもらう、というのは現実的ではないが、テレパシー装置の補助があれば一度くらい深層意識を共有することは可能だろう、という考えだった。

「しかし、それは欠陥品のはずだ」

「いいえ、はかせ。はかせの装置は完璧ですよ。はかせがメアとテレパシーできなかったのは、他に理由があります」

「他の理由？」

「続きは夢の中で話しましょう。出てこい、ミルホッグ」
おれは話を強引に打ち切り、未だに尻込みしている様子のはかせの背中を蹴飛ばす勢いで、ミルホッグに指示を出す。
「ミルホッグ、さいみんじゅつ」
ミルホッグの催眠波動によって一瞬で頽(くずお)れたはかせの体を、素早く抱きかかえて床に寝かせたあと、おれとコジョンドはテレパシー装置を被って、ムシャーナと向かい合った。
自分の半身がおれに眠らされるところを彼女も見ていたはずだが、敵意を読み取らなかったためか、メアに怒った様子はない。それどころか、傍目には不可解なはずのこの状況を、理屈を超えた視点で完全に理解しているようですらあった。
テレパシー装置のスイッチを入れ、おれとコジョンドはメアに意識を集中させる。
おれとコジョンドの視線を受け止めたメアは、ふよふよと宙に浮かび上がり、次の瞬間、急激に吸い込まれるような感覚とともに、おれの意識は闇に落ちていった。

★★★

ムンナ種が見せる明晰夢の世界は、トレーナーとムンナ種の関わりの深さにもよる

が、幻想的で楽しげな雰囲気の漂う、いわゆる「夢の世界」であることが多い。ムンナ種が絆を深めたトレーナーを楽しませようとして、工夫を凝らすからだ。

しかし、メアの世界はそんな傾向に反して、極めて殺風景な光景が広がる世界だった。

まず、色がない。世界のあらゆる視覚がモノクロのみで表現されており、楽しげな雰囲気が欠片も伝わってこない。当然その辺りにむしポケモンが長閑に飛んでいるなんてこともないし、足元に花々は咲き乱れない。地形の変化も少ない。というか、ない。三百六十度真っ平らの地面が延々と地平線の果てまで広がっているだけで、山も谷も見えない。

そんな非現実的な世界が、理不尽なほどのリアリティを伴って、おれとコジョンドの前に立ち現れていた。

「これが、明晰夢の世界か」

はかせとメアはどこだろう。

思い起こして周囲を探してみると、最初からそこにいたかのように、先ほどまで何もなかった空間にはかせとメアの姿が現れる。

さすがに夢の世界だ。この世界での現実は、人の内面の意識に引っ張られているらしい。

「はかせ、どうですか。これが、メアの作り出した夢の世界です」

「なぜ、ぼくがこの世界に……。ぼくは、メアとの繋がりを失っていたはずだ。この世界は、メアとの繋がりを持つものしか入れないはずなのに」
「それが答えですよ」
「なんだって？」
「今ご自身でおっしゃったじゃないですか。つまり、メアの方ははかせのことを拒絶してはいなかった、ということです」
「ばかな……。それならばなぜ、テレパシー装置の実験はうまくいかなかったんだ？　見たところ、きみも明晰夢の世界に入れている。ということは、ぼくの開発したテレパシー装置は、欠陥品ではなかったということだろう？　それならば、一体なぜ……」
「簡単なことです、はかせ。メアがあなたを拒絶していたのではなく、あなたがメアを拒絶していたのですよ」
「どういう意味かね？　ぼくは確かに、彼女との繋がりを求めていた。そのために五十年の時を費やし、精神感応の正体を探っていたのだ」
「ええ。そして、完全なテレパシー装置を開発して、彼女に謝罪をしようとしていた、ですよね？　ここでひとつ質問なのですが、あなたは彼女に一体何を謝罪しようとしていたのですか？」
「何を、だって？　決まっているだろう。チャンピオンロードでの敗戦のおり、無様を晒

したぼくのトレーナーとしての不徳を、だよ」
「メアがあなたにそれを求めたのですか？」
「そうではないが、罪を犯したのなら、謝罪するのは当然のことだ」
「罪ってなんですか？」
「決まっているだろう！　ぼくが彼女にバトルを強い、あまつさえ敗北させて一生消えない傷を負わせてしまったことだ！」
「なるほど、ですけど、それって矛盾ではないですか？」
「だから、何が！」
「はかせ、覚えていますか。あなたはメアのことを、己の半身だと言ったんですよ。一心同体の関係だったと。あなたたちが本当に一心同体の関係なら、はかせ、あなただけに罪があるなんてのは、おかしな話ではありませんか？」
　そう、最初からおかしかったのだ。はかせのメアに対する態度は、どう考えても奇妙だった。大きな部屋まるごとひとつ与えて過剰なまでの保護下に置こうとしたり、人目には触れないようにして、あくまでも自分で世話をしようとするのは、「半身」に対する態度ではない。それはむしろ箱入り娘に対する態度であり、内面の理解からは程遠い関わり方だ。そしてそれは、かつてのはかせとメアの関係とは、正反対といってもいい関わり方のはずなのだ。

「たしかに、ポケモンとトレーナーの違いはあるでしょう。どれほど内面を理解し合えるとはいっても、バトルをするのはポケモンの方で、指示を出すのは人間です。危険にさらされるのは常にポケモンであり、トレーナーとしてあなたには彼女を守る義務があったのは確かです。あなたに責任がないとは言わない。あなたに罪がないとまでは言いません。でもね、はかせ。そうだとしても、それであなたが彼女から距離を取っていたのでは、本末転倒なんですよ」

「……！」

「一生消えない傷を負った、バトルをすることもできなくなった。あなたは、そんな非常事態にあってこそ、いつも通り彼女と接するべきだったんです」

　そんなことを口では言いながらも、おれは自分自身に対して嫌気が差していた。おれみたいな若造が、はかせの五十年の苦労を察することもできないのに、口だけで偉そうなことを言っている状況に、辟易していたのだ。自己嫌悪の蟻地獄に飲み込まれそうになりながら、それでもはかせの誤りを指摘することこそ「助手」の役割だと自分に言い聞かせて、おれは言い切った。

「あなたは彼女を、宝物のように大切にしまいこんでおくべきではなかった。同情し、哀れむのではなく、あくまで半身として、痛みを共有しようとすべきだったのです」

「それは……」

はかせは消沈した様子でなにかを言い澱み、口を閉ざしてしまう。
彼は迷っている。痛みを伴う試練を前にして、一歩が踏み出せないでいる。はじめてバトルに挑む子供のように、形のない不安に囚われてしまっているのだ。
はかせは今一度顔を上げ、縋るような視線でおれを見る。
「それならぼくは、一体どうすればいい?」
「罪悪感を消し去るしかありません。あなたとメアの絆は偽物ではないのだと、あなたが心の底から信じ切れるように、あなたは自分の手で 、もう一度勝利を勝ち取るしかない。……おれと、コジョンドが相手になります」
「しかし……」
「はかせ、おれに、あなたの恐怖を推し量ることはできません。あなたの抱えるトラウマは、若輩者のおれでは察するに余りある。だから、これ以上は何もできません。おれはあくまでも臨時の助手に過ぎない。最終的にどうするのかは、あなたが決めてください」
おれは祈るような思いではかせを見た。
結局、どこまでいってもこの問題は、はかせの問題なのだ。おれが横から手助けをして、たまたまよい方策を思いついたところで、最終的にははかせ自身の手によって解決されなければならない。おれがどんなに余計な手出しをしても、この問題自体をはかせ

から取り上げることはできないのだ。
やがて、俯いていたはかせは顔をあげて、灰色の世界にふよふよ漂うメアを見た。メアもまた、まぶたの向こう側からはかせを見つめている。しばらくじっと、視線と視線は宙で交差し続け、それから二つの視線は同時に離れた。
はかせが、おれの方を向いて言う。
「よろしく、お願いするよ。ぼくはやはり、もう一度彼女との繋がりを手に入れたいんだ」

★★★

バトルは、静かに始まった。
灰色の大地以外には本当に何も存在しない、無という概念を表出させたかのような明晰夢の世界で、おれのコジョンドとはかせのムシャーナ（メア）が相対する。
牽制の意味で放たれるコジョンドの軽い攻撃を、必死にやり過ごすメア。コジョンドの流れるような連続攻撃の滑らかさに対して、メアの回避行動は見るからにぎこちなく、序盤の立ち上がりの段階ですでにいっぱいいっぱいな様子だった。
形勢の優劣は明らかだ。有利なのは、コジョンドの方。通常のバトルならばもちろん

喜ぶべきことだが、今ここに限ってはそうではない。

おれの仮説では、はかせがメアとの繋がりを取り戻すには、はかせがおれに対し勝利を収めなければならない。根深いトラウマを克服し、メアの半身としての自身を取り戻すためには、成功体験は欠かせないからだ。だが、勝てさえすればそれでいい、というものでもない。はかせに必要なのは勝利という結果そのものではなくて、メアとのコンビネーションによって勝利するという過程なのだ。だから、おれとコジョンドが手を抜くとか、わざと負けるみたいな小細工をしてもあまり意味はなく、むしろ逆効果になりかねない。

ここでのおれの仕事は、本気ではかせを倒そうとすること。その役割に妥協は許されない。

「コジョンド、『はどうだん』」

コジョンドから距離を置き、得意なロングレンジを維持しようとするムシャーナを、特殊技のはどうだんで追撃する。

「メア、避けろ！」

はかせの指示はいちいち思考にラグが入ったように遅い。熟練のトレーナーならばほとんど反射的に行える回避の指示にも、コンマ二、三秒の遅れが出てしまっている。そのわずかな遅れが積み重なって、全体的に後手後手に回っているのだ。

はどうだんは吸い込まれるようにメアを捉え、圧縮されたエネルギー弾がメアの小さな体を吹き飛ばす。

もともとムシャーナが鈍足な種族ということもあって、はかせはバトル開始以降一度も、コジョンドに対して積極的な手を打てていなかった。通常、足の遅いムシャーナが攻撃に回ろうと思うのなら、一度や二度の被弾は覚悟して、むしろカウンターを狙うくらいの勢いで主導権を奪いに行く必要があるのだが、はかせはメアが傷つくことを過度に恐れているため、その指示を出せないでいるのだ。

「はかせ。こちらの技に対処するだけでは、バトルには勝てませんよ」

「しかし……！」

「戦ってください、はかせ。メアもそれを望んでいるはずです」

「だけど、メアはバトルのせいで、自由に出歩くこともできない体になったんだ。バトルに連れ出したぼくのせいで！　そんな彼女が自ら望んでバトルをしたいと思うわけがない……」

「それは違います、はかせ。あなたもよく知っているはずだ。ポケモンは、人間よりもずっと自由で、素直で、率直です。本当にメアが戦いたくなかったのなら、彼女はあなたに全力で逆らったはずだ。ましてやあなたたちは、主人と従者ではなく半身同士だったのだから！」

「……！」

「おれなんかよりもあなたの方が、よく分かっているはずです。人間がいくら技術を発達させようと、本当の意味でポケモンを支配することなど、できはしない。いい加減気づいてください。あなたはムシャーナにとって、横暴な主君などではなかった。あなたがメアを使って戦ったんじゃない。あなたとメアは合意の上で、共に共通の敵に立ち向かったんだ。かつての関係を取り戻したいと考えるなら、自分一人で責任を取ろうとするのはやめなきゃならない！」

戦況が加速し、おれとはかせの声が何度も空中で交錯する。

「メア、『まもる』だ！」

「コジョンド、『フェイント』」

ムシャーナは眼前に透明な防壁を展開し、コジョンドの攻撃に備えるが、コジョンドはタイミングを外した打撃で防壁をすり抜けてムシャーナを捉える。

『はどうだん』で回避はできないと刷り込まれた相手に、防御不能の『フェイント』を叩き込む。おれとコジョンドがよく使う十八番だ。連続して指示を封殺されたトレーナーを精神的に乱すこともでき、これまで何人ものトレーナーに対して勝利を納めてきた実績のあるコンボだった。

コジョンド渾身のフェイントを受けたムシャーナは灰色の大地に叩きつけられ、すぐ

には立ち上がることができない。

「メア!!」

はかせが悲鳴をあげ、メアの元に駆け寄ろうとする。その表情は悲痛に歪んでいて、彼は今にも自責の念に押し潰されそうになっていた。

しかし、はかせがメアを抱き起こそうとしたところで、何かの力がはかせの手を遮った。メアからはかせの方向に向かって不可視の斥力が発生し、はかせを突き飛ばして尻餅を突かせてしまう。

メアの『ねんりき』だった。

「メア……?」

呆然と見つめるはかせの視線の先では、メアがふらつきながらもゆっくりと宙に浮き上がり、はかせではなくコジョンドの方を向いて、今日一番の咆哮を上げた。

「きゅるるるるるるっっっ!!」

灰色の世界をびりびりと震わせるような、戦士の雄叫び。

それは騎士の名乗り上げのごとく、敵であるおれとコジョンド、そして味方であるはかせにも堂々と自らの存在を主張する、信念の声だった。

コジョンドの連続攻撃でダメージは確実に蓄積しているはずなのに、再び立ち上がったメアは先ほどまでより大きく見えて、凛としてコジョンドに相対するさまは、勝利を

求める意思の力に満ちている。
「メア……」
呆然と尻餅をついたままメアを見上げるはかせは、信じられない様子で目を見開いていて、そのはかせをメアは『ねんりき』でもとの位置にまで運んだ。まるで「あなたの立ち位置はそこだ」と言わんばかりに。
はかせは少しの間何も言えなくなっていたが、やがて覚悟を決めたように、一度大きく深呼吸をしてから、まっすぐおれの目を見た。
おれは言った。
「続けます」
「ああ、そうしよう」
はかせの目に、もう迷いはなかった。

★★★

そして、バトルは回る。
メアの喝破によって、はかせは彼女のトレーナーとしての自信を少しずつ取り戻しはじめ、バトルの中で右肩上がりに調子を上げている。ずっと噛み合っていなかった歯車

と歯車が、大きな衝撃を受けて再び噛み合ったように、はかせとメアのコンビは力を取り戻していた。

はかせの指示でメアが活き、メアの行動ではかせの思考が回転する。まさしく二人は、互いに互いを補完する理想的なパートナーシップを形成していた。

急激に速度を増していく戦況の中で、おれとコジョンドもまたこれまでにないシンクロ状態の中にいた。

明晰夢の世界という特殊な環境だからか、あるいはテレパシー装置の効果なのか、おれとコジョンドは互いに全くクリアな視界で、意思の疎通を成立させることができていた。もはや言葉さえもいらないのではないかというくらいに、おれの思考とコジョンドの行動が同調していって、おれたちはまるで「おれたち」というひとかたまりの存在であるかのようだった。

コジョンドが攻めて、メアが受ける。ポケモンたちの攻守は目まぐるしく入れ替わり、トレーナーは互いに最適解を選択し続ける。

回る、回る、バトルは回る。

やがて空気抵抗さえも置き去りにして、永遠に回り続けるのではないかと思わせるほどに、遮るものなどどこにもないのではないかと思わせるほどに、くるくるくるくると回り続ける。

それは勝負のはずなのに、まるでおれとはかせとコジョンドとメアによる共同の演舞のようでもあり、その一員としてバトルを回し続けることに、おれは奇妙な達成感を覚えている。

勝者と敗者を無慈悲に選り分ける勝負。全員が調和し、一体となる演舞。

それらは正反対のもののように見えて、その実どこか本質の部分で繋がっているものなのかもしれない。ちょうど、イッシュ建国神話で双子の王それぞれに加勢した、「理想」を象徴するポケモンと、「真実」を象徴するポケモンが、もとは一体のポケモンであったのと同じように。

事ここに至って、おれは自分の中からこのバトルのために掲げていた建前のようなものが消えていくのを感じていた。

はかせに自信を取り戻させてあげるためのバトル。

最終的には、どうあってもおれが負けなければいけない勝負。

心の底で抱いていたそんな雑念が、神聖な光によって浄化されるように消えていく。

はかせに自信を取り戻させてあげる？

最終的にはおれが負けなければならない？

何を言っている。お前は一体何様なんだ。いまおれが戦っているのは、かつて全トレーナーの目標であるポケモンとの一心同体を体現していた天才ポケモントレーナー

だ。遠慮なんてしている場合か？　違うだろ。全力で、勝ちにいけよ。
最後のしがらみを振り払って、おれは今度こそこの奇跡のようなバトルに没入していく。
おれが見据える先では、ムシャーナに指示を送るはかせの姿が、先ほどよりも若返って見える。これは錯覚でもなんでもなく、この夢の世界の中だけで本当に若返っているのだ。精神が肉体に優先する明晰夢の世界では、自分の見た目も自己印象（セルフイメージ）の影響を受ける。つまり、はかせが「自分は若返った」と感じたなら、この世界の中では本当に若返るのだ。
メアが生み出したこの世界は、いわば夢の現のはざまの世界。意思の強さがそのまま現実に影響を及ぼす世界であり、理想と真実が混ざり合った灰色の世界なのだ。
「コジョンド！」
「メア！」
トレーナーの声に応えて、ポケモンたちはもう何度目とも知れない衝突のあと、弾けるようにトレーナーの前に戻ってくる。
もう両者とも、残りの体力はわずか。コジョンドは肩で息をしているし、メアも満身創痍の状態だ。一撃、クリーンヒットを食うだけで戦闘不能に陥ることは明白だった。
コジョンドがちらりと振り返っておれに許可を求め、おれはこくりと頷いた。

真正面。メアの後ろに立っておれを見据えるはかせの姿は、いまやおれと変わらないくらいの年齢の少年になっている。

かつてこの地方のジムバッジを制覇し、ポケモンリーグさせ呑み込もうとしていたころの、才能溢れるポケモントレーナーとしてのはかせの姿が、時を越えておれの前に蘇っているのだ。

おれと目が合うと、はかせはその顔に獰猛な戦意を帯びた笑みを浮かべて、おれもそれにつられて歯をむき出しにして笑った。

スクール時代からフキヨセジムでのバトルまで、積み重ねたバトルの経験がおれに与えた、勝負師の「勘」のようなもの。それが、頭の中で告げている。

ここが、勝負どころだ。どんなに拮抗したバトルにも必ず訪れる、「分け目」の瞬間。混沌とした灰色の戦況に、勝者（シロ）と敗者（クロ）という秩序を生み出してしまう、決定的な「そのとき」が来たのだと。

こういうとき、おれがコジョンドに与える指示は、いつも決まっていた。コジョンドが覚えて以来、バトルの最後を託す切り札として、気の遠くなるような時間を費やして錬磨してきた。これまで何度もおれたちに勝利をもたらしてくれたその技を。

いま、ここで。

刹那ののち、示し合わせたように、おれとはかせは同時に叫んでいた。

「コジョンド、『とびひざげり』!!」
「メア、『サイコキネシス』!!」
おれとはかせの見つめる先で、コジョンドとメア、それぞれの最高の一撃が激突し、次の瞬間、世界は真っ白に炸裂した。

★★★

そして、研究所を発つ日がやってきた。
早朝に目を覚ましたおれは、はかせと二人で最後となる朝食を共にしていた。メニューは数種類のサンドイッチで、これははかせが腕によりをかけて作ってくれた。朝食が始まってからしばらくは会話はなく、食器のかちゃかちゃと鳴る音だけが、二人の間を満たしている。決して気まずい沈黙ではない。おれには、間を持たせるために無理に話さなくてもよい関係というのは、話さなければならない関係よりもよほど強力な信頼の表れである気がして、少しうれしかった。
ゆっくりと朝食を口に運びながら、おもむろにはかせが口を開いた。
「少年、君には、感謝してもし切れないくらいの恩を受けたね。本当にありがとう」
唐突に切り出され、おれはわずかに狼狽える。スクール時代からひとりぼっちが長

かったせいで、こういった直接的なコミュニケーションにはまだ慣れていないのだ。
「いや、えっと、おれも一応長い間泊めてもらったわけですし、助手として働いただけというか……」
素直に感謝を受け止めなられないおれを、はかせはあのにこにこ顔で見守っている。この三ヶ月は毎日顔を合わせていたはずだが、この表情は久しぶりに見たような気がする。
「君はぼくの人生に、かけがえのない贈り物をくれた。君がいなければ、絶対に受け取ることができなかった贈り物をね」
「……」
なんと答えていいのかわからず、おれは黙ってぺこりと頭を下げる。
「訊いてもいいかい？」
「はい、なんですか？」
「あの夢の世界でのバトルで、きみはなぜメアを相手にするのにコジョンドを選んだんだい？」
「別に、大した理由ではありませんけど」
「ぜひとも聞かせておくれ」
「はあ、まあ、そこまでおっしゃるなら」

おれは少し間を空けて話す内容を吟味してから、再び口を開いた。
「……主に、理由は二つあります。ひとつは、単純に信頼度の問題です。コジョンドはおれが一番最初にゲットしたポケモンで、いわばおれの相棒です。どんなに重要な勝負だろうと、どんなに相性の悪い相手だろうと、おれが最も信頼してバトルを任せることができるポケモンといえば、コジョンドしかいない。これまでもそうしてきたし、これからもおそらくそうだと思います」
「ふむ、なるほど。では、もう一つは？」
「……はかせを見返したかったから、でしょうね」
「ぼくを、見返す？」
「覚えていますか？　おれとあなたの初めてのバトルで、あなたはおれのギガイアスをチラチーノで完封しました。視界もフィールドコンディションも最悪な中でのバトルで、あなたはあまりにも鮮やかに、タイプの相性を戦術でひっくり返してみせた。おれはあのとき、トレーナーとしてあなたに完敗を喫したんです。だから今度は、タイプの不利なコジョンドで、あなたのメアを超えてやろうと思った……。多分、そういう気持ちが無意識のうちに働いて、コジョンドを選んだんだと思います。……結局、負けちゃいましたけどね」
そう、あの夢の世界でのバトルは、最終的にはかせとメアの勝利で終わっていた。

コジョンドの破格の身体能力と体重の全てを乗せた『とびひざげり』は、メアの『サイコキネシス』を打ち破ることは出来ず、コジョンドは大きく弾き飛ばされてそのまま戦闘不能になったのだ。

そしてそのまま、おれとコジョンドは夢の世界から現実へと帰還することになった。おれとコジョンドが夢から戻ったとき、すでにはかせとメアは目覚めていた。当然だが、はかせの姿は元の白衣の老人に戻っており、あの世界は本当に夢の中だったのだと、そのとき初めて実感できた。

はかせは緊張した面持ちで、メアを見ていた。メアも普段閉じているはずの両目をぱっちりと開いて、はかせのことを見つめていた。一人と一匹が向かい合う様子を、おれとコジョンドは黙って見守っていた。

はかせは、おそるおそる口を開いた。

「メア……?」

声は震えて、語尾は掠れてしまっていた。なけなしの勇気を振り絞った一声だった。

『おはよう、ニゲラ』

その声は、空間に染み渡るように聞こえた。耳や頭蓋骨を透過して、意識に直接染み渡るような声音。それはテレパシー装置を被ったままだったおれとコジョンドにも聞こえてきていた。

「夢じゃ、ないのか……？」
『ええ、今度はちゃんと現実。夢の世界じゃないわ』
　はかせはそこで、まるで子供のようにメアにすがりついて泣いた。わんわんと声を上げて泣くはかせを、メアは安心させるようにゆっくりとあやしていて、おれはテレパシー装置を取ると、メアにちらりと目くばせしたあと、コジョンドを伴って部屋を後にしたのだった。
　はかせが、しみじみと言う。
「なるほど、初日のバトルをね。それは、残念だなあ」
「ええ、とても。――もはや、叶わぬ夢になってしまいましたから」
　あの日、コジョンドとおれははかせとメアの前に敗れ去り、そしてもう二度と、リベンジマッチをすることは叶わない。はかせがメアとの繋がりを取り戻して、ちょうど一週間後、メアは息を引き取ったからだ。
　幸福だったその一週間を振り返って、はかせは言う。
「本当に、奇跡のような時間だった」
　あの日から、はかせとメアは片時も離れることなく、互いのためだけに互いの時間を使って過ごした。失った五十年を取り戻すように、心を通わせ合って一人と一匹だけの時間をゆっくりと味わったのだ。

おれはポケモンたちと協力して、彼らができるだけ長い間一緒にいられるように、身の回りのことを全てこなした。おれもコジョンドもテレパシー装置は外していたから、彼らがその間にどんな話をして、どんなふうにお互いを確かめ合ったのか詳しくはわからない。

それでいいと思う。確かなことは、彼らが真の幸せの中で、心と時間を共有することができたという、その事実だけでじゅうぶんだ。

そして、最後の時はやってきた。メアは最期、眠るように息を引き取った。常に目を瞑っていて、覚醒と睡眠の境界が曖昧なムシャーナというポケモンだけれど、生物が命を失う瞬間というものは不思議と神秘的な気配を伴うもので、おれにもはっきりと、その瞬間を察知することができた。

半身の死を思って、はかせはぽつりとつぶやく。

「なぜだろうね。不思議と、悲しみは無いんだ。もちろん彼女にもう会えないというのは寂しいけれど、それ以上に、彼女に終わりに納得している自分がいる。これでよかったんだって、思えている自分がいるんだよ」

ここではないどこか遠いところを眺めながら、はかせはにこりと笑った。

メアが息を引き取ったあと、おれとはかせは二人でタワーオブヘブンの共同墓地にムシャーナを埋葬した。タワーオブヘブンは7番道路の途中にあるポケモンたちの墓が

集まった塔で、その名の通り天国へ続く階段のような静謐さを備えた建物だ。はかせは旅の日誌やジムバッジケースなどと一緒に、テレパシー装置を副葬品として埋葬した。

棺を埋めるとき、おれは思わずはかせに訊いてしまった。

「その装置、埋めてしまうんですか？」

「うん。これは多分日誌やジムバッジ以上に、ぼくが彼女のことを思っていた証になると思うからね。天国では楽しい気持ちでいてもらいたいけど、ぼくがどれくらい彼女のことを思っていたのかも、忘れないでいてもらいたいんだ」

「でも、すごい発明品なんですよね？　五十年もかけて作った、はかせの集大成だって言っていたじゃないですか。学会で発表すれば、きっと大きな評価になりますよ」

「かけた時間やコストは、問題じゃないんだ。ぼくは飢えているわけではないし、儲けようとか目立とうと思って作ったものではないからね」

おれにははかせの主張に納得がいかなかった。これほどの偉業を成し遂げた人物が、皆に認められないのは許容し難い世界の「バグ」であるような気がしたのだ。

おれが難しい顔をしていると、はかせは笑って言った。

「前に話したろう？　ぼくはかつて目立ちたがりの傲慢な若者だった。才能を持て余し、増長した挙句に何よりも大切な半身を傷つけた。それは全て、本当に必要なもの以上のものをぼくが得ようとしたことが原因だったんだ。だからぼくは、彼女と心を繋げ

る目的で作ったこの装置を、それ以上の目的には使わないと決めていた。彼女は確かに最後に全てを許してくれたけれど、教訓はしっかり生かさないと怒られてしまうよ」

はかせの表情は見惚れるほど晴れ晴れとしていて、そこには本当に、ひとかけらの未練も残っていなかった。

おれは自分の未熟が恥ずかしくなり、同時に、はかせのことを強い人だと思った。なぜそんな感想を抱いたのだろうと、ずっと考えていたけれど、つい先ほど、ようやく答えらしきものにたどり着いた。

要するに、はかせは受け入れたのだ。自分の弱さを、過去の罪を、耐えがたいはずの半身の死さえ受け入れて、その上でもう一度生きていこうと決断を下した。

それにひきかえおれは、フキヨセジムでの敗戦からずっと、辛いものから逃げていた。自分の才能を否定する強者の存在や、敗北という事実そのものから逃げて、言い訳を欲しがった挙句に、ねじ山を越えようとした。弱さを突っ撥ねて、おれは弱くない、弱くないから強いのだと主張しようとしたわけだ。弱くないことが、強いということだと思っていたから。

だけど、そうじゃないということを、おれははかせから学んだ。弱さを突っ撥ねたら強さが見つかるのではない。弱さを受け入れて、呑み込んだ上で一歩を踏み出せる人が、強さを手に入れるのだと教えられた。ならば、はかせがそうしたように、おれも。教

訓は、生かさねばならないだろう。
　すでにサンドイッチを食べ終え、コーヒーを飲んでいるはかせに、おれは言う。
「はかせ、おれ、ねじ山に行くのはやめにしました」
「それはまた唐突だね。それじゃあ、これからどうするんだい？」
「フキヨセシティに戻ります。忘れ物を、思い出したので」
「そうかい……そうだね、うん。忘れ物は早いうちに取りに行くべきだ」
　はかせは相変わらずにこにことそう言って、おれもまた、つられて笑った。
　朝食を食べ終えたおれは荷物を持って研究所を辞した。久々に背負うバックパックはずっしりと重く、その重みが三ヵ月より以前の記憶を否応なく呼び覚ます。
　腰にモンスターボールを全て取り付け、おれは見送りに出てきてくれたはかせに頭を下げた。
「本当に、お世話になりました。ここでの経験は、たぶん一生忘れません。ありがとうございました」
「ああ、気を付けて行きなさい。ジム制覇がんばって。応援しているよ」
「はい、はかせもお元気で」
　おれは振り返って、歩き出す。頭の中では研究所で過ごした日々がフラッシュバックしていて、おれは名残惜しい気持ちに囚われる。

そのおれの背中に、はかせが声をかける。

「最後にひとつだけ。長年研究してきたぼくにはわかる。少年、きみもまた、ポケモンと心を通わせる感応者の素質を持っている。その才に飲み込まれることなく、一歩一歩を踏みしめて歩きなさい。大丈夫、きみにはぼくよりもずっと才能がある。

――きみなら、いつかこのイッシュのチャンピオンにだってなれるよ」

最後の最後に、そんな『おいかぜ』を吹かせて、はかせはおれの背中を押してくれた。

これなら、大丈夫だ。おれは歩いて行ける。ポケモンたちと一緒なら、どこまでだって。

はかせから貰ったたくさんの経験を胸の中にしっかりしまいこんで。

七番道路をフキヨセシティの方角へ、おれは一歩を踏み出した。